

ドゥーチェ異世界にて
戦うようです

ゆっくり霊沙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドゥーチエのとある作品を見て書きたくなつた。

ドゥーチエをアンチヨビに変更しました。

読んでる人は違和感があるかもしれませんが申し訳ない。

慣れてください

目次

プロローグ	1
貴族のアンチヨビ	
始まり	6
機材	10
モレニ	14
希土戦争	18
シユーズ	22
航空倶楽部	26
電気	38
計算外	47
路上の軍隊	55

神の世界	64
社長のアンチヨビ	
戦略の中	68
エンジン	77
会合	81
ケイ	84
謀神	88
總統のアンチヨビ	
ダキア革命	92
第一次アテネ・ブルリア防衛戦	96
第一次アテネ・ブルリア防衛戦2	100

144	究極的至高の超素敵なヘツタン	140
	宝珠と王子	136
	選挙	133
	戦争の効果	129
	終戦	125
	魔導師の実力	122
	6ヶ月戦争 3と4ヶ月目	119
	6ヶ月戦争 2ヶ月目	115
	戦略兵器	111
	3の矢	107
	2の矢	104
	1の矢	

	戦争と国家主席のアンチヨビ	
	幼女戦記開幕	148
	天災、鬼才、君の名は：．．	152
	国防計画	156
	皇太子殿下	160
	戦争経済	165
	皇族将軍	169
	主人公	173
	石原あ	177
	第一次共和国進行	180
183	?<シャーマン>ヘツツア<KV>I	
	貧弱すぎた合衆国経済	186

プロローグ

戦車道・・・大学が終わると戦車道をしていた人は4つの選択しから進路を決めていく。

1、プロリーグもしくは社会チームに進む

行ける実力があれば行けば良いと思う。

私はあえてしなかった。

2、結婚もしくは婚活

戦車道自体が良妻賢母や大和撫子を育てる目的なので道的には一番あっている。

まあ私にはそんな相手はいなかったがな。

3、戦車道の指導者になる

これが大半である。

指導者が学園艦ならともかく、本土では深刻な指導者不足であり、本土で枠がなくて隣国に行けば職が無いことはない。

なつてもよかったが、別の魅力を感じた。

4、就職

戦車道のチームの隊長は引く手あまたである。

例えばそれが弱小高校でも隊長だったという実績だけで大企業に入れる。

私の場合は高校時代に強豪のマジノ高校を破った、大学選抜チームに勝った等の実績もあり、大学でも隊長をやっていたので、自動車会社である名古屋自動車のイタリア支部に送られた。

初年度の年収950万・・・来年には1000万を超えるため勝ち組である。

何故就職を選んだか・・・それはアンツイオ高校により良い戦車を寄付するためである。

P-40を購入したため、次は史実でイタリア軍が鹵獲した過去があり、それに乗って戦闘したこともあるT-34を購入して後輩たちの励みになればと働いていた。

かれこれ10年イタリアで働いた後、本社に戻され、欧州販売部門の役員となり、エリートと・・・いや、幹部候補と呼ばれる程になっていた。

イタリアにいた時にはエンジンの整備、開発に関わり、自分で造ったエンジンが動いた時には感動した。

そんな幸せな日々も突然終わりを迎える。

青砥駅

30後半になった私はハガキで送られてきた過去の仲間達の結婚報告や第何子誕生報告を眺めていた。

ドン

「あ……。」

たまたま誰かとぶつかりそれで体勢を崩した。

ちようど電車が通る。

無駄だが腕をクロスにして衝撃に備える……が、いつまでたつても衝撃が来ない。

『信仰心の薄い現代人よ。』

!?

時間が止まった。

『貴女は他者への共感力は溢れている。しかし神への信仰心を知らぬ。』

『現代人は物事の理から外れすぎている。』

『物事には容量がある。虫の70億と70億の人類では人類の方が管理が難しい。この数の管理は神ですら厳しすぎる。』

何を?ん?

白い動物が目の前に現れる。

『お困りのようだね。』

・・・・キュウベえ？

『さつき喋っていたのは僕の部下の君達からは神と呼ばれる存在だよ。今君がキュウベえと言ったこの体はただの借り物であり、君の中で神と呼ばれる存在がこのようなのだったら良いのという思いを具現化しただけだ。』

『僕の手を見てごらん。綺麗だろ？』

そこには白と紅の混じりあう宝石があつた。

『君・・・にはソウルジエムと言えば分かりやすいかもしれないけどあれとは違い絶望ではなく、その人物の人生が詰まっているんだ。これは3回目の転生で精神を消耗し尽くして亡くなった女の人生が詰まっているんだ。』

『君にこの宝石をあげるよ。きつと役に立つよ。』

『ただ、神にはナイシヨだよ。僕は君の味方だ。じゃあまたね安齋千代美。』

なんだったんだ？今のは？

『君には神の信仰心を取り戻してほしい。次なる絶望のような来世のなかで。』

「ま、まって!!」

バン

安齋千代美死亡 没39歳

貴族のアンチヨビ

始まり

ダキア大公国・・・時代錯誤の旧式の武器が軍の主武装であり、ルーマニア王国は第一次、第二次大戦ともにボロ負けをしている国であり、グレートゲームで例えるなら駒・・・しかも捨て駒である。

何でかね。

私はこの国を可能な限り発展させれば良いのかな？

幸いなことに世界は共和国包囲網と昔のビスマルク体制にしているため、私のいた世界なら十数年はこの国は大丈夫だろう。

といってもバルカン戦争のような戦争があればそれはそれで困るけど・・・。

メフメット帝国・・・オスマン帝国の代わりと思われる国家。

当面の警戒すべき場所はここだろう。

まあ赤ん坊の私にはまだ関係の無いこと。

語っていないが私の両親は大地主であり、前世で言う黒海周辺に大規模は土地を

所有している。

上手く使えば・・・戦車に乗れるかもしれない。

名前は皮肉かアンチョビ・・・アンチョビ・サン・ホテロという名である。

現在6歳、魔法使いと呼ばれる存在がいることは知っていたが、まさか私がそうだと
は・・・。

両親が大地主だから魔法使いの検査を受けることができたが、農民や農奴と呼ばれる
存在は検査を受けることができないらしい。

・・・そんなのこの国だけである。

前世でドイツと呼ばれた帝国では孤児でも検査を受けているし、それは産業、軍事を
発展させるために必要不可欠である。

・・・遅れすぎだろ・・・。

父親が私に激甘なのを利用して私は帝国に留学に出掛けることにした。

帝国……機械が並ぶ工業の国。

私の印象はそれだ。

ナチスの熱気があるわけもなく、人々は忙しく働いていた。

私はダキア人ということで学校初日は他の生徒から様々な目で見られていたが

「ドゥーチエ!!ドゥーチエ!!ドゥーチエ!!」

これにした。

10日も有れば余裕でこう洗脳ゲフンゲフン 親友?にすることができる。

前世のブリカス(ダーズリン)や杏から

「ちよび髭並のカリスマ」

と言われる程に話術には自信があった。

まあ戦車道始めて数日で道場の隊長育成コース(最難関)に入れられたかいはあっただろう。(師範がドゥーチエのカリスマを見抜いてぶちこんだ)

私が通う学校の子ども達は魔法使いでもDからEまでの魔力しか持たないため、郵便局員(2戦級予備役)を育成するコースだが、ダキアの学校より100倍ましであった。

「ドゥーチエ!!これをみてください!!」

友達から私は帝国の様々な情報を入手していた。

それは料理のレシピから自分の人には言えない秘密等のどうでもよいことから父親

の職業等であつた。

職業を知れば、現場を見たいと言える。

大抵は町工場なので許可さえ有れば見せてくれる。

職人気質なので子どもながらに称賛すれば厳つい大人もひねくれてなければ照れたり喜ぶ。

最後にはまた来なと言つてくれる。

それを続けながら技術を盗んでいく。

悪どいかもされないがこうでもしないとわからないものである。

機材

まずどのような行動をすれば地位を向上できるか。

戦争でも上流階級に居れば何等かの形で生き残ることが可能だし、戦後も安泰……だ
と思う。

現在はビスマルク体制もとい共和国包囲網も連邦と共和国の同盟で解除

とにかく生き残るのもそうだが今ある魔力を使った軍事的な何かを……いや、この
際生活を向上させるような画期的な物を作りたい。

それに……ダキア公王国の近代化のための資金集めにもなる。

まあ帝国の中で何かを作る気は無かったが、郵便局からの賞金10万マルク……前
世に直すと1200万円位だな。

特許使用料が帝国が半分貰う代わりとしての賞金で、軍事技術に繋がる物だと受賞し
やすい。

それを貰って会社でも創るたしにしようと思い、友人達の町工場から貰った機材で
ロードスター型自転車造った。

1970年代の自転車だが自転車の完成形と考えれば後々にも売れるし、近々作ろう

と思つている原付自転車への発展させるために必要だと思つたのだ。

自転車は帝国のような大国なら労働者階級が、他の中小国なら重要な移動手段として使つて貰うことができるし、ダキア公王国周辺の国に輸出することができる。

近代化のための工業化の1歩を踏み出すことができるのだ。

と、一人長々と頭の中で妄想を膨らましてはや3日。

出展用の自転車が完成した。

軍需品をアピールするため車体の横にかごを取り付けて銃弾、多少の食料、小銃が運べることをアピールした。

校長室に呼ばれた。

「帝国工業大賞受賞（副大賞 賞金半分の5万マルク）おめでとうアンチヨビ君。まさか留学生がこの賞を受賞するとは思わなかつたよ。」

そりやそうだろうな。

「帝国の軍の方も君の発明を高く評価しているよ。地上の歩兵の移動速度の上昇や、魔

導師不在時の伝令等も期待できる。」

軍と明確に言つて来たか。

「どうだい？亡命というのは？知り合いは沢山いるのだろうか？」

「校長先生、私はダキア人です。しかも貴族です。国を豊かにさせる義務があります。帝国には感謝していますが、すぐに国を捨てるような者なら帝国でも信用されず捨てられるでしょう。なら、私は帝国にもダキアにも利となる行動をするのみ……だと考えております。」

「ほう……考えがあるのか。」

「ダキアは帝国の下にある諸国で頭ひとつ抜けていますがその諸国の2つに攻め込まれたらたちまち崩壊するような弱国でもあります。帝国はメフメツト帝国と仲が良いですがその間にあるダキアが邪魔でしょう。そこで帝国の技術を使った鉄道を引くための土地を格安で私が帰国後に提供しようと考えています。もちろん帝国側は技術援助という形になると思いますが。」

「続きを。」

「帝国側は国家戦略の選択肢が増えます。また、技術格差が帝国とダキアでは約20年近く離れているので不用となった旧式の機材を売り付けることができるでしょう。鉄道がなければその機材を使うための石炭の入手ができないのでダキアの命を帝国が握

ることができません。ダキアの利は省略しますよ。」

「考える余地はあるが・・・軍部はアンチヨビ君の魔力量AAという規格外の量を欲している。」

「では私は軍人にはならないと言うのはどうでしょう。」

「ダキア軍人にならないのか？」

「はい。今ダキアに必要なのは金です。1人の強い軍人よりも100人の普通の経営者を欲していますよ。下は。」

「下・・・だと？」

「・・・帝国の隣にある王国のような火が燻っていると軍は必要ないのです。」

「大王国か・・・革命。」

「帝国は大丈夫でしょうが、ダキアは半世紀以内に起こるでしょうな、そのような事態になれば帝国は未知の国家に囲まれる可能性もあります。」

「妄想ということにしておく。せいぜい足掻け。」

「では、これで。」

校長室を退出する。

モレニ

現在友達に魔法工科大に行っている学生がいることを知り、私はコンタクトを取った。

そのの大学で使われている魔導師が飛ぶために必要な魔導演算宝珠を見て質問をしていった。

質問といっても私とその人物を見てどんな人物かを観察した結果、とにかく知識を取り込みたい人物だとわかったので質問しながら自分なりの指摘をしていった。

「素晴らしい!!なるほどの配管の配置をずらすだけで効率化できる!!アンチョコビ君流石だ!!ダキア人は産業革命前の石頭というのは偏見だったな!!また来てくれ!!君のアドバイスが必要だ!!」

「いえ、ヒランさんの頭脳の賜物ですよ!!」

こっそりその魔導演算宝珠の設計図を写す。

機材的には3世代前だが少等科にある魔導演算宝珠よりも最新型である。使える。

だけど私が求める物ではない。

・・・けれどこれは戦車で言うところのノーのような発展させるための基礎になってる。改良を続けていこう。

学校の授業で空を飛ぶ時間がある。

私は魔力量が大量にあるがそれでも効率化に力を入れた。

約800メートル上空で飛行しながら防壁を張っていく。

それを見ながらどの様な銃が必要かを考えた。

国力が低くても早期に大量の銃が生産でき、操作も比較的簡単な銃・・・これがダキアの絶対条件。

私的にはイタリア王国軍が使っていた銃を生産したいという気持ちが無いわけではない。

だけど欠陥銃を無駄に生産するほど余裕はない。

昔を思い出しながら何の銃が良いか考えた結果、イスラエルという国を思い出した。

国力が無に等しい状態から戦争を重ねる毎に強くなるユダヤの国。

その国の銃であるIMI ガリルというアサルトライフルを思い出したのである。

「ガリルだけじゃない。国家モデルはイスラエルをもとにしていけば……」

そういうことから論文集団効率運動、皆の姿、近代化論等をダキア語で発表使用とするが、王制批判も含まれていたので、書き直し、全てをまとめた近代ダキアという論文を発表した。

王制や軍には一切触れず、現状できる国力向上化政策について長々と書き、小さく愚民政策の弊害を書いた。

この論文は大王国（後の連邦）の革命家の手に渡り、アンチヨビに連邦2等勲章が送られる。

私はどちらかというトファシズムなんだがな。

イスラエルだけでなく思い出していくなかでダキアに直接関わる物も思い出した。

モレニ大油田である。

この世界では魔法の発展から石油系に対する価値が相対的に低下していたので油田の場所が限られていた。

そこで5万マルクを投じて油田があると思われる場所を購入、採掘機材も購入、残った僅かな金で起業した。

油田は無事に発見、採掘され、利益を出していくようになる。

家族もこれには大喜びで私の会社に財産の殆どをつぎ込んでモレニ油田の約6割り

を抑え、大規模な収入源を手に入れた。

経営は一時家族に任せ、学業に専念し、翌年飛び級で中等部に進む。

「ここつちに来ないか？モレニ油田の収入のお陰で黒字だから今よりも高い金が払える。」
友人達の親の引き抜きを開始した。

ただ誘うのはしたっぱの職人もしくはしたっぱの銀行員などである。

モレニ油田の件で私が貴族であることがバレてしまったが、余計に崇拜されてしまったが、この機運を利用して私は彼らの両親に得意の話術で引き抜いていった。

職人達に作って貰うのは自転車や基礎機材、銀行員は会社の経営である。

地盤は硬く、より硬くしていく。

希土戦争

この世界は魔法という奇跡の力が関わったり、なにかが少し違ったがために時間のズレがでている。

第一次希土戦争・・・ギリシャとオスマントルコの間でおこなわれた戦争であり、バルカンが火薬庫と言われる少し前の近代戦である。

技術の進み具合を考えると2年の遅れである。

・・・で、帝国にいる私はメフメット帝国（オスマン）の戦いを直接見るわけにもいかず、伝えられる情報から推測して戦況予測をすることしかできなかった。

さて、私も学業に戻るか。

アンチヨビは新聞を机に置くと、学校にむかった。

私は1人の少年と話していた。

ニコラエ・チスク・・・おそらくニコラエ・チャウシエスクだろうと私は思っている。

因果の歪みか産まれる年代がずつと早い。

「ダキアをドゥーチェはどの様な国にしたいのですか？」

「国家社会主義がダキアに必要なだが、国際社会は完全な自由主義を求めて、大王国が新たな世界に変わる。それは社会主義を求める。」

「すみません、学の無い私にもわかるように教えてください。」

「段階式の国家モデルが必要・・・ということだ。まずダキアに必要なのは工場だ。鶏か卵かどちらが先かという理論で言うところ鶏が国家体制、卵が国民や国力を現すとするならば私は卵から作ろうとしている。」

「どちらが・・・先か・・・ですか？」

「どちらも一長一短あるが、元から基盤があれば卵からの方が私は良いと思っている。」

「なるほど・・・この話を広める気はありますか？」

「見つければアウトだ。慎重に事を進めなければならぬ場所もある。機密重視だ。」

「わかりました。ノークオーク!!ドゥーチェ!!」

ルーマニア語・・・いや、ダキア語でドゥーチェ万歳という意味だ。

なんか不思議な気分だな。

朝5キロ、夕方5キロ・・・前世から続けてきたトレニングだ。

戦車道をやってる人は例外を除いて、狭い車内を自由に動ける柔軟性、怪我にならないように筋肉の防御を身につけないととてもでないが危なくてできない。

今世ではマラソン後の柔軟体操のお陰か立った状態で足に手をつけるだけにとどまらず、床にべつたり手をつけれる。

まあこれぐらいは普通だな。

うん。

しかしなんとというかサウナだけでなく風呂に入ってその後に牛乳を飲みたくなる。

本質の日本人的習慣は今世でも適応されるのか・・・。

体が外人だから味が少し変わっていたらやだなあ。

米の甘味が感じられなくなるとか・・・。

キュウベいからもらったソウルジェム・・・私の昔見ていたアニメなら狂気の産物だが、キュウベいは精神を消耗した者と言った・・・中に精神があるのか。

見てみたいという好奇心がある。
怖いという恐怖心もある。

「とりあえずこれが何に使えるか・・・探さないと。」
12歳のことだった。

シューズ

帝国は南下を開始した。

メフメット帝国との距離を縮めるため、同じ民族国家の吸収の2つを前提とした侵略戦争だ。

まあ私には見守るしかできないが……。

この世界にオーストリア帝国は存在しない……つまり、大ドイツ……大ライヒ主義の完成を目指した戦いになる。

「ドゥーチエ、我らが帝国は勝利しますよね!!」

クラスメイトの1人が言ってくる。

「負けることは天地がひっくり返ることがない限りないだろう。それよりも何日で征服……いや、保護下に入れられるかを賭けた方がいいな。」

そういきるとなぜかドゥーチエコールがおこった。

そこは帝国万歳でしょ。

私は靴屋で靴を眺めていた。

中等科に上がる前にある約2ヶ月の休み・・・まあ帝国の生活は一旦終わり、祖国ダキアに帰っていた。

・・・ニコラエ・チスクを連れて・・・。

チスクは私より2歳も若いのに天才的な頭脳で私の補佐をしてくれている。

主に設計関係だ。

あいにく私は理科もできるが上手く設計図を引くことに時間がかかっていた。

それを彼は素早く行うことができた。

なので彼は私の横によくいたし、今回も連れてきた。

話は戻るが、なぜ私が靴屋なんかにいるかという点、簡単に工業化でき、それでいて売れる品物を作りたいと考えていたからだ。

「貴族様、庶民の靴なんか見て楽しいんか？」

靴の前で眺めていたら店主の靴職人が出てきた。

「いや、何が売れるか考えていてね。こんなのはどう？」

私はスポーツシューズ、ウエリントン・ブーツ（雨靴）を見せる。

「最初の靴（スポーツシューズ）なら売れるんじゃないか？後半のは（共和国からの）輸

入品に有るからな。」

共和国・・・ダキア最大の支援国である。

列強では現在第4位の位置にいる。

ダキアでの工場はほとんどが共和国の支援によるものだった。

まあ今は関係ない。

「なるほど、スポーツシューズ・・・か。ありがとう。」

スポーツシューズをただ新製品として売るのは売れない可能性があるし、元がとれないかもしれない。

そこで私はスポーツシューズ、さらに追加で作らせた安全靴を会社の社員に配った。するとその姿を見てチラチラと売れ始め・・・そしてブームとなる。

私は利を独占することはしなかった。

国内の靴屋に手紙でスポーツシューズの設計図、安全靴の設計図を送り、特許使用料で2種の売り上げの1%をもらう代わりに作って売って良い旨の手紙を送りつけた。

大半は詐欺だと手をこまねいたが、200店の靴屋が私の家宛に手紙を送ってきた。

本当だと証明するとダキア、更に隣国となったライヒ帝国に爆発的な広まりがおこる。

「靴屋とのコネができた。何よりも大切なことだ。・・・靴屋を集めて工場を作ろう。」
自転車に靴・・・更には石油と着々と資金を貯えるアンチヨビだが、とある物に投資をし、そして開発した。

アンチヨビが動かせる資金の実に8割にも昇るが、合成ゴムという石油からできるゴムはまさにこの国に富むために必要な発明だった。

よし、これで流れはできた。

ゴムは科学技術を高めるためのシンボルとなる。

自転車は農業国家からの脱却に一役買える、次はエンジンを作るためにトラクターの会社を国外からの融資で作ろう。

農業国家に現地工場の方が輸送が楽で売りやすいし、共和国、帝国ともに自国の影響力を強めたいからな。

そこからエンジン技術を盗もう。

次は・・・次は・・・

・・・戦車に乗りたくないな。

いや、乗る!! 必ず!!

航空倶楽部

ダキアでは現在航空魔導師が絶滅危種並みに少ない。

特権階級の本当に一握りしかいないのである。

今更ながらであるが、私は両親を貴族でも中くらいだと思っていた。

フットワーク軽いし、選民意識低いし……。

現在15歳……遅れながらの初舞踏会に参加し、そこで気がついた。

……辺境伯……つまり、公王国……王の血が流れてない中で一番高い地位にいた。

そうでなければ日本という関西の半分程の大きさの土地を治めているのはおかしかった。

「父上、領内の発展方針をお聞きしたいのですがよろしいですか？」

夜遅くにアンチヨビが私に話してきた。

女性がこんな時間まで起きていることに感心はしないが、アンチヨビのことだ、なにか思い付いたのだろう。

「アンチヨビの会社からもたらされる石油の利益で富み始めた。この富みで城の改築を使用と思っている。」

「その改築を少し待ってくれませんか？」

「なぜだね？」

「トウルチャにダキアの第2の心臓を作ろうと思ひまして。」

「トウルチャ・・・1万人の小さな町にか？」

「はい。」

現状父が治めるワインの町フォクシャニに私の基盤があるが、地理的にここでは工場群を建てるのは厳しい。

なのでトウルチャという場所に眼をつけた。

ダキア版中京工業地帯を作ろうと思つたからだ。

海が近いため輸出品を造りやすく、平地が多くあるため工場も建てやすい。

寂れた造船所と港がある場所が近いため活気づけば人が集まりやすい等の高立地であると私は確信している。

「ならやってみなさい。．．あとそろそろ結婚を視野に入れておけ。遅くなったら国に関わる。」

「．．．わかりました父上。」

イオン・アントネスク元帥を探そう。

彼なら戦車に関心を持ち、ハンガリーで元帥までのしあがった人物だから．．．優秀であり、近代的思考を持っているだろう。

「ダキアは大王国（ロシア）とライヒ帝国、イスラーム圏の拡大を狙うメフメット帝国の様々な意味合いで防波堤となります!!しかし、現状では土塁にもなりません!!どうかあなたの会社の力を借りたい。勿論対価はしっかりと払わせてもらいます。」

土下座外交の如く海外の様々な会社に融資、誘致の誘いを行った。

技術が有りそうなどころにはどこへでも飛んだ。

最初は15の少女として軽く見られたが、悪魔じみた交渉術や、具体的な返済方針、数カ国同時に競りのようにした新しい誘致の方法等々．．．這いずり回った結果、日本の八幡製鉄所（この世界では秋津島皇国という国の製鉄所）を設計したHGG社から安く大規模製鉄所の誘致に成功し、ライヒのダキア利権拡大を恐れた連合王国、共和国は

それぞれ鉄道会社ロンドン・ディニウム・アンド・ノース・イースタン鉄道が港からモレニマでの新規鉄道利権を落札、新規紡績と製紙工場を共和国政府が落札した。

莫大な資金がかかるが、様々な利権、空手形、融資等々など、で25年計算で返済できるようにした。

それを間近で見ていたチスクは改めてアンチョビを化け物だと思うと同時に役に立ちたいと共和国語、連合王国語を勉強した。後に外交の魔術師と呼ばれ、世界戦略をも動かしていくニコラエ・チスク外務大臣の誕生だった。

「トウルチャを治めている貴族様の所に行けば飯が食えるそうだ。」

「わしも聞いた。」

トウルチャの都市改造をおこなっているとそんな噂話がダキア全体に広がり始めた。私の思った通りだ。

農民は今年の不作で飢えている。

飢えているのなら食料を輸入して渡せばいい。

大切な労働力だ。

絶対に無駄な死などさせるものか。

アンチヨビは今年の不作を知らなかったが、農民反乱が起ることは知っていた。だから大規模な登用を生み出す企業群に誘致させたとも言える。

ただ、都市を一つと会社を動かしていくなかで思った。

ダキア人上層部の組織運営能力の低さを・・・。

トウルチャの前貴族はこれらの問題を棚上げ、先送りを繰り返し、トウルチャ経済停滞を巻き起こしていた。

この停滞をライヒから連れてきて、ダキアで数年過ごした銀行員達を市の組織にねじ込むと物流が流れ始めた。

そこで初めて前貴族が棚上げをしていた理由を知る。

「教育が足りてない・・・。」

そう私は痛感せざるをえなくなった。

この問題は父親だけでなく、その分野の専門家達を海外から呼び、議論を重ねた。結論は無理と不可能。

国の憲法（王令）により愚民政策が採用されているため、一部を除きダメであり、法律を破れば改易、降格の可能性すらあった。

法律を変えるのは骨が折れる・・・変える？・・・いや、穴はないのか？

次に私は法律の穴、それを探した。

法律の穴は見方をを変えればすぐに見つかった。

「私兵だ。」

辺境伯となれば約2万5000の兵を戦に駆り出す義務がある。

それすなわち軍であり、軍は教育を施すことが許されている。

ただ、大半が農民で、一時的な徴兵に答えているだけなので、実際の常備兵が何名いるか把握できていない。

父親がそうなのだから住民の大半でなければこちらがいくらか私兵を持ってもバレない。

この私兵を後の教員とすれば・・・いける。

すぐに私は行動に移した。

郊外に兵舎（小学校の校舎）を作らせ、町の中央部や人通りが多い場所に看板を建てた。

《兵士求む》

検査だけ 1食1回限り 適性あり1日3食 他の職紹介する》

とにかく簡潔に、誰にでもわかるようにした。

理由として字が読めない者が大半の元農民の子供達（出稼ぎ）の人を狙っていたからだ。

困窮した農民の兵は強い。

私が出た日本の武田信玄率いる武田軍等が良い例だし、農民は村で家族関係が完結する。

反乱を起こす中心になりやすく、都市部の影響で士気が上下する労働者出身の兵に比べれば何百倍も扱いやすい。

看板だけではなく、自費を削って私は安いパンを買い込み、それを餌に街頭演説を行った。

サクラを周りに仕込ませ、木で作られた台から雄弁を私は振るう。

ダーズリンや杏が見たら爆笑するだろうな。

「困窮した民の諸君!!私には君らを助ける力がある!!まずは私の話の耳を傾けて欲しい!!」

パンを食べている間に聞き終わり、頭に入るような分かりやすく、それでいてインパクトのある言葉を言う。

初日はパン目当てだったが、次第についでに演説を聞こうとする人が集まってくる。最後まで演説を聞いてくれたらパンをもう1つ渡すようにする。

こうしていると兵舎に人が来るようになる。

魔導適性を強制的に受けさせ、次に身体検査これらが終わるとどちらも適性無しは公共事業の労働者として送る。

魔導適性D以上ありが22名、180センチ以上の若い男性は140名か・・・一期としては十分だ。

「諸君!!よくここに来てくれた!!私は歓迎する!!」

～1時間後～

「君達は未来の軍隊の中核となっていくだろう!!そのためには・・・」

ハナシナガイネ

ソウダネ

～2時間後～

「そもそも私兵の歴史は紀元前まで遡る・・・」

アシガツカレタ

プルプル

～3時間後～

「ダキア人とその他の民族では意識の違いがある、とても優れたとは言いがたいが時勢を読む力が・・・」

オナカスイタ

ソウダネ

（4時間後）

「共和国は国民と言う単位で完結するが、ダキアは村単位で完結してしまう!!なぜか・・・」

カエリタイ

カエリタイ

ウウ

「ドゥーチエに付いてこい!!このドゥーチエが導いてやる!!」

ドゥーチエ?

ドゥーチエ?

「そうだ。ドゥーチエだ!!」

ドゥーチエ!!

ドゥーチエドゥーチエドゥーチエ!!

まあこんなものだろう。

その日はそれだけで終わつたが、次の日からは小学校の授業を始めた。

私がいいた頃の小学校は昔にしてみれば中等科の軍事教育であると調べているうちにわかつた。

例えばだ、食事の前に手洗い、うがいは衛生という意識を芽生えさせるために必要だし、机に長時間座るは、長時間の行動に耐える忍耐力を養う目的があつたりした。

ちなみに先生は各国の退役軍人（手足に怪我をして日常生活が困難な若い軍人）を集め、教師をしてもらった。

カリキュラムは私が纏めあげたが・・・なぜか彼らは感心していたが・・・なんだつたんだろうか？

『どうだい？一区切りついた頃かな？』

キュウベえか。

・・・神様も暇なのかな？

『そのキュウベえ言いづらいならQBでいいよ。・・・そうだね、暇と言えば暇になるね。これでも僕は偉いからね。頼れる部下に任せていたんだよ。』

いた？

なんで過去形？

『この世界を管理している者……管理者がポカをした。信仰心を無理矢理集めようとな。宝珠は管理者の欲望から生まれた物だ。この宝珠……それは有つてはいけないものだ。』
私は普通に使つてるけど？

『人が使う分には問題はない。管理者が産み出したことに問題があるんだよ。』
ふん。

『あ、そうだ。安斎千代美、君に良い情報をあげよう。管理者はこの宝珠を最大限利用して信仰心を集める舞台を整え始めた。更にキーマンを異界から呼び寄せようとしている。賢い君ならわかるよね？』

大戦のタイムリミットか。

『そう。だけどその前になにか起こるだろう。頑張れとしか言えないけど……いや、1つ助けることができるや。』

なに？

『君が持つているソウルジエムは抵抗となり、くっ付ける性質を持つている。』

抵抗と接続……まるで電気だね。

『恐らく管理者も電気をベースにしているね。さあこれがヒントだよ。時間だからまた

ね。
』
また。

電気

電気・・・電気か。

ダキアにも発電所はあるが、どうしても出力が弱い。

しかし、出力を上げるための新規発電所増設はトウルチャの改造が終わるまでは無理であり、現状は蒸気機関と併用しながらエネルギーを確保しないとイケない。

QBの話の聞いていると魔力は電気のようなエネルギー体らしい。

「チスク、来なさい。」

「ドゥーチエ、どうしました？」

「私が言った通りに図を描いていつて。」

「はい。」

私は覚えている限りの電気に関係する図を書かせていく。

魔力の出力を上げるには・・・直列に宝珠を結合すれば良いしかし、それでは接続部分に魔力の溜まりができてしまい、最終的に宝珠は崩壊する。

学校でも習う基本知識である。

ではソウルジエムを使えばどうか？

ソウルジエムに宝珠を近づける・・・

パチ

「ドゥーチエ？その宝石は？」

パチ

「これかい？これは魔導宝珠とソウルジエムと呼ばれる物だよ。」

「魔導宝珠はわかりますが・・・ソウルジエムとは何ですか？」

「直訳で魂の宝石。まあ魔導宝珠の抵抗材と言われているよ。手に入れられたのは本当にたまたまだったんだがな。」

「そのソウルジエム、それに魔導宝珠は私が書いている図面に関係が有るのですか？」

「有るかもしれないし、無いかもしれない。だから実験しようと思う。」

私はソウルジエムに魔力を流していく。

2つの魔導宝珠は薄い青色の光を放つ

んん？緑色ではないのか。

パチ

3つ目は普通の青色の光を

パチ

4つ目はやっつと緑色に

パチ

5つ目は金色の光を放つ

「綺麗ですね。」

チスクは魔導宝珠の5連直列接続という現象の凄さを知らなかったな。

魔導学部への代わりに国際教養学部だったからな。

仕方がないと言えば仕方がないか……。

「魔導宝珠の直列接続はどの国でも成功していない。」

「え？」

「魔導宝珠は直列に繋がると宝珠が真っ赤に光り、そして熱を外に放出する。これは小規模な爆発を起こす。」

「それではこの現象は!？」

「抵抗材を挟むことで過剰なエネルギーを逃がしている。……ということだ。」

「なるほど……。」

「この過剰なエネルギーも銃や防御時に展開する障壁を強化できるから無駄ではないんだけど……。」

「ドゥーチエ、質問です。直列ではと言いましたが、他に方法が有るのですか？」

「整理するから少しだけまって。」

ササつとペンを動かして紙に各国の宝珠の運用方法を書く

「まず、現在公開されているライヒ帝国、ルーシー大王国、連合王国、共和国の順で説明する。」

「帝国の魔導宝珠はエレニウム式と呼ばれ、長方形の箱形演算装置にくっ付ける方式を採用している。これらを全て合わせて魔導演算宝珠と帝国では言っている。・・・特徴は性能の良さと生産性の悪さ、整備性の微妙さがある。無理矢理詰め込んだ感じだからな。仕方がないだろうと言えばお仕舞いだが・・・さつきも言ったが性能は本当に良い、4500フィート・・・つまり1500メートルを飛べる。」

まあ隠しているか、最新の物を研究しているだろうな。

私なら抑止力以外の高性能兵器は秘蔵すると思うからな。

「次はルーシー大王国だが・・・生産性に全振りした使い捨て魔導宝珠だな。演算装置の性能も微妙で、自力で微調整しているくらいだからな。・・・それでも私達が持っている魔導宝珠や演算装置よりも性能は上だがな。」

「で、連合王国と共和国は世界中の演算宝珠を生産している輸出用から推測するに、全て平均値の宝珠で扱いやすさが一番の魔導宝珠だ。・・・今度輸入したいな。」

「協商連合や下のメフメット帝国はどうなのですか?」

「こちらと似たり寄ったりだな。独自生産しているようだが厳しいだろう。まあうちの

宝珠よりは性能は良いだろうがな。」

「改めてダキアは弱い事がわかりました。」

「公王が化石のような頭だから仕方がないとしか言えないな。・・・まあ日進月歩だ。技術はな。チマチマ研究していくしかない。」

「一歩だけ抵抗材というリードが有りますから、これを軸に研究していきましょう。」
「そうだな。」

ソウルジエムは無理だが似たような素材があれば良いが・・・探すしかないか。

「諸君らにまず求めることはなにか？」

「軍人として自国の為に死ぬことです!!」

「違うな。」

「アンチョビ様に忠誠を誓ったこの身であなたを凶弾から守ることです!!」
「違う。」

「君達にまず求めていること・・・それはプロパガンダ、つまり宣伝だ。」

「宣伝ですか。」

私は教壇に立つて講義をしていた。

時間とは早いもので約10ヶ月という期間で愛国心と忠誠心溢れる民兵が完成した・・・民兵止まりなんだよなあ。

「君達に街中で行進してもらいたい。銃を構え、楽器で音を奏で、そして食料を配る。」

「「は!!」」

「役割はこちらで決めておく。君達用に新しい制服をここで配ろう。」

私は魔法で教卓の前に沢山の箱を浮かせながら運んだ。

「デレット君前に。」

「は、はい!!」

一人一人名前を言っていく

そしてハグをしながら耳元で囁く

「期待している。これからも頑張ってくれ。」

と・・・。

経験上大抵の奴は堕ちる

堕ちない奴は何かしら自信がある自信家か中二病患者、枯れた奴のどれかで、ここに
いる連中は・・・

ドゥーチエドゥーチエドゥーチエドゥーチエドゥーチエドゥーチエ!!

鳴り止まぬドゥーチエコールが証拠だった。

「みっちりやるぞ、覚悟しろ!!」

ザワザワ

「アンチヨビ様だ。」

「また台に立ってるよ。」

「飯くれないかな。」

もう民衆は慣れたか。

ならばよし。

ドンタダダダ　ドンタダダダ　バンバンバン

町の中央から黒服の集団が行進をしてくる。

先頭が太鼓を叩き、後ろにはダキアの国旗を持つ旗手、さらに後ろから銃を持った兵

隊が行進する

ドンタダダダ　ドンタダダダ

「す、すげえ!!」

少年少女達は目を輝かせ

「おお!!」

歩行者は足を止めてその光景を見る

「お前さん稼ぎ時だよ!!」

めざとい商人の婦人は机を出して物を売る

「婆さん農らも。」

老人達は持つているハンカチや布切れを音に合わせて振る

ダダダダダ　ダダ

音楽が終わると中央広場の私の前に兵隊が整列する

そして音響魔法で語りかける

『パレードは始まった。毎月20日の晴れた日にまた行進をお見せしよう!!我々は何時でも君達を待っている!!』

ワアアアアア

歓声が響く

その後は炊き出しであり、無料のスープやパンを配っていく人が集まり話し合い、そして行進の感想を言っていく。

「私も参加したい。あの全体芸術に。」

その日、1人の男が兵舎の扉を叩いた

ジョジョ・エネス・・・元の世界ではジョルジエ・エネスク

ルーマニア狂詩曲を手掛け、当時世界最高のヴァイオリン演奏者であった

計算外

チスクとジヨジヨ、2人は天才だ。

私に無いものを持っている。

チスクは計算により世界を見る。

ジヨジヨは音を魂に伝え、それに世界が感動する。

だけど私は思う。

時代が早すぎる。

今は軍が力を持つ時代だから政治家も、音楽家もこの時代には早すぎたんだ。

なぜこんなことを今思うのか・・・ちゃんとした理由がある。

ダキア西部、イルドア（イタリア）王国と常々紛争が絶えないこの地域に帝国が侵攻してきたのだ。

「父上、戦況は？」

「アンチヨビか。早かったな。」

実家の屋敷に馬（車欲しいな）で駆けつけると、真っ青な顔をした父上がいた。

戦況は最悪なのだろう。

「西部の貴族4家が当主死亡、2家が降伏だ。幸い公弟様が何とか戦線を食い止めている。」

「敵に魔導師は？」

「ごく少数観測班がいるらしいと聞いている。」

「なら・・・」

「アンチヨビ、悪い顔をしているところ悪いが、女に戦場に出すわけにはいかん。町を治めながら中等部首席なだけでも今は十分だ。」

「父上は出るのですか？」

「出るには出るが、逆方面のルーシー大王国の国境ちかくだ。」
なら安心だ。

ルーシー大王国は・・・そろそろ死ぬ。

「話は以上か？」

「はい。ごく武運を。」

「ああ。」

「ドゥーチエ、集合が完了しました。」

「よろしい。．．．第1、第2魔導師中隊この銃を渡しておこう。」

戦場に絶対に行く。

ただし私が死ぬわけにはいかないし、仲間達も死なすわけにはいかない。

そこで、狙撃に徹することにした。

現在使用している銃の砲身を長くして、威力を強め、脚を着けた即席狙撃銃だが、私が微調整しながら自力で作った約4倍スコープ（約と付くのは個人で作ったので誤差が酷いのと、魔法の補助効果を得てしてやっとなら4倍になるように作られている）を使われている

ヤスリやバーナーで1つ1つ調整するの辛かった．．．絶対に機械で量産できるようにしてやる。

「10日以内に1キロ先の獲物を狙い射てるようにしろ。なに、魔導師の魔法の力で対空抵抗緩和をすれば当たる。自信を持っていけ!!」

「「はー!!」」

私にこの時代を生きれるか、軍人としての才能が有るか……確かめるためには私は人殺しに行く。

7日間の休みを中等部に提出し、魔導宝珠に魔力を込める。

体が浮き上がり、時速60キロのペースで小隊規模で編隊を組んで進んでいく。

「目的地付近、着陸用意!!」

通信魔術を使い各自に命令していく。

着陸後、狙撃ポイントにて待ち伏せをおこなう

可能な限り身を伏せて、地面に体を擦り付けながら……

スコープから見た戦場の景色……ちぐはぐしているな。

近代戦でありながらそれが戦術と噛み合っていない。

砲撃や銃弾を守る盾が塹壕と自分達の肉体しかない……残酷で、生々しい光景だった。

カチ

「司令官らしき人物を狙え。」

私も目標となる人物を探す。

あれは……

『見つけちゃったか。まあ僕には関係ないね。僕は安齋千代美だけの味方だからね。君はどう思うかい？老婆。』

『私は彼女のための前菜でしかなかったのが悔しい……とでも言えればいいか？』

『ソウルジエムにしたのは悪いが、君の自我を残すにはこうするしかないのさ。神の慈悲だよ。』

『どう見ても暇潰し……いや、年取ると本音がすぐ出るね。』

『まあいいよ。……君から見て安齋千代美はあれを殺せるのかな？』

『彼女自身では殺せないだろうね。』

『だろうね。……また語ろう、老婆。』

『神、あなたもね。』

「歩兵の連携密度を上げる。観測魔導師を1度下げろぞ。」

「よろしいのですか？大佐。」

「ああ、私の望む戦ではないがな。」

「大佐は戦車という新兵器を欲しているのですな。そこまで戦争を変えるのですか？小生には点でわからんですが。」

「変わるさ。それを見届けたら私も軍人を引退するがな。」

「30歳の小娘と思っていましたがな。」

「何年前の話をしているのだ大尉。さて、仕上げだ。我々も突」

「大佐？」

ドバ

「大佐!!」

「や、やった!!こ、殺した!!」

「大声を出すな。気付かれる。ゆっくり後退するぞ。」

「はい。アンチヨビ様。」

あれは・・・西住まほ・・・いや、気のせいだ。

彼女はこんなに簡単に死にはしない。

それよりも次のポイントに移動しなければ。

ライヒ、ダキア進行と呼ばれるこの戦争は謎の狙撃により12名の将官候補が戦死した。

ライヒにとっては誤算であったものの、狙撃してきた部隊と思われる小隊の死体を確認したため鬱憤は下がる。

「5名の死・・・か。」

1 小隊が欲張った。

その小隊が一番戦果を上げたのは事実だが、これまで手塩をかけて育てた対価と比べるとあまりに少ない。

「・・・馬鹿者め。」

路上の軍隊

戦場での戦闘は私に戦車道の未練を絶ちきる決意を固めさせてくれた。

どこかでフェアプレイのスポーツマンシップに乗っ取った行動という感情があったが、仲間の死、自国民の死、敵の死、敵の殺意を感じたら、そんなものはどこかに飛んでいってしまった。

戦争は3週間で終わり、国土の25%を失い講和が結ばれた。

事実上の敗戦を新聞で読んだ時、私が本格的に動く時が来たと感じた。

手始めに、戦争によって退役した元軍人を集め、教師陣を補強した。

私の腹心のチスクとジョジョ、それに17名となった魔導師、140名の第一期生を纏め、防衛隊という組織を編成した。

ナチスドイツの親衛隊に近いが、基本的にはイタリアの黒シャツ隊のような組織にしようと考えている。

まあ、規模が規模だから私兵の粹からでないがな。

戦争は人を不幸にする。

家を焼かれた者、家族が殺された者様々だ。

私は貴族の地位を持つ者としてそんな彼らを守る義務があり、隣人愛の精神が不幸な者を助けようと動く。

「チスク、あなたに戦争孤児や退役軍人を集めてほしい。私のサインが入った書類を持つてな。」

「わかりました。しかしドゥーチエ、それだけでは説得しづらいかと。」

「わかっている。この袋に金が入っている。これで何とかしてくれ。」

「わかりました。」

「チスクでよろしかったのですか？」

「ジョジョ、人にはそれぞれ役割がある。私は他の組織との関係強化をしなければならぬし、希望を与えられるような演説も考えなければならぬ。ジョジョ、君は来月に行う新しい行進曲を仕上げなければならぬのじゃないのか？」

「そうですが……。」

「チスクは今の私の組織としての役割を任せるような人物にしたい。だからその下準備をさせている。ジヨジヨ、君は今のよう^にに気持ち^を届ける演奏^をしてくれ。」

「わかった。」

トウルチャの人口が最近増えてきている。

チスクに言わなくても自力で移動できる者は職を求めてこちらに來たようだ。

そんな中就活支援や生活保護にて活動する防衛隊や、訓練中の2期生（500名）魔導師13名、3期生（500名）魔導師20名は彼らから見て救世主に見えるのだから。

4期募集は万を超える応募者が殺到した

最初のトウルチャ人口が1万ちよつとの小さな町だったことを考えると凄まじい数である

やり過ぎだな。

ここまで大規模になると王も黙っていないだろう。

その予感^は的中する

「トウルチャ町長、アンチョビ・サン・ホテルに登城命令が王より下された。2日以内に

来るように。」

来た。

普通なら詰みだろう。

この時点で・・・だが、私はまだやれる。

即座に処刑は無いだろう。

国家転覆を狙っているわけでもないからな。

まあその前に仕込みが終わってよかった。

玉座・・・王が座り、周りには賢者を自称する老害、民から富を吸い上げる悪徳貴族、各種大臣が立っていた。

父親がいらないところを見るに、切り捨てたな。

私のことを。

それか、私なら大丈夫だと思っているのか。

「貴様は国家反逆罪の容疑がかけられている。王の前で弁明できる最後の機会だ。述べよ。」

「……」

「沈黙は認めたと取るぞ。」

「まあまて。朕はアンチョビ、貴女に聞いておる。」

「祖国ダキアはカイロ（エジプト）だ。私はこの緊迫した状況下で祖国を生き残らせるには、現在あるような軍では太刀打ちできないと考えている。ライヒにある参謀のような組織が必要不可欠であり、国家Ⅱ民族主義的な面からもこの動きは内外どちらかの動きで進められなければならない。ダキアは外からの圧力を受けやすい。始めに言ったカイロはアケメネス朝ペルシャや今なお存在するメフメット帝国はカイロを取ったことによりギリシャに進攻した。ギリシャは今のメフメット帝国であり、大王国であり、ライヒ帝国です。カイロはダキア。つまりどこかがこの地を取ればそこに進攻しやすくなる。そんな絶妙なパワーバランスの上にいる国が愚民政策や、騎士道精神の中での作戦立案……時代錯誤も甚だしい。」

「公王陛下を侮辱するのかわ!!」

「侮辱もなにも……私は祖国に忠誠を誓っているものであって公王陛下に忠誠を誓っているわけではない。」

「ぶ、無礼者が!!」

「……それで全てか？」

「私にも隠したいことは有ります。まあそれだけと言えばそれだけですな。」

「獄に連れて行け。」

「「は!!」」

兵士に連れて行かれる。

私は抵抗することなく獄に入っていた。

「アンチヨビ様、アンチヨビ様。」

夜中、獄で寝ていた私を起こす声が聞こえてくる。

「夜中に何か用でも看守長殿?」

「アンチヨビ様の精神に感銘した者であります。トゥルチャ町長として書かれた本を読みました。」

「そうか・・・で、君はどうする?」

「国外に逃げてください。ここから出します。」

暗くて見えなかったが、周りには数人の看守と囚人が立っているようだ

「なるほど君達は私に付いてきてくれるか・・・強国ダキアを見るために。」

細身の囚人の1人が前が出る

「私は共産主義者ですが、この国が好きだ。その矛盾点をアンチヨビ先生は本で記してくれた。1 国社会主義説・・・先生ならこの国を変えてくれる。」

「トウルチャに戻る。それから船で新大陸に向かう。」

「新大陸。」

「付いてくれるか。」

「二ノークオーク、アンチヨビ。」

「お帰りなさいアンチヨビ様。」

「チスク、ただいま。戻ってくるの早かったね。」

「ドワーチエの一大事です。飛んできますよ。」

「今いる防衛隊のメンバーとジョジョを集めてくれ。」
「わかりました。」

「防衛隊をジョジョの指揮下に置く。今まで通りの活動をしてくれ。新町長予定者は私のシンパだ。そこから君達に指示を出す。期を見てこちらに戻る。待っていてくれ。」
「ドゥーチエ、予算は。」

「新しく私が作った国際銀行に予算は振り込んでいる。そこから引き出すと良い。防衛隊は3期までの人員でなるべく回してくれ。増やしても300名までだ。良いな。」

「わかりました。」
「魔導師は私に付いてきてくれないか。この国を変えるために必要な技術を一緒に集めたい。」

「喜んで!!」

「歩兵隊の皆はすまない。だが、君達は私の居ないところで国民に訓練をしてもらいたい。些細な事で良い。それが国を変える。頼んだ。」

私は旅立つ。
新しい土地に。

神の世界

『・・・まだ信仰心に目覚めぬか。』

神は悩んでいた。

何者かの介入により安齋千代美の運命が改変されていることに・・・

『智天使、妙案はないか。』

『この際切り捨てましょう。コントロール出来ない存在を野放しにしておくのは困りましよう。』

別の天使が出てくる

『しかし我々は直接手出しできません。』

『次の人物を送りましょう。幸い目処は付いております。』

『この人間味もない、効率主義の無神論者か。適任だ。・・・円理を外れから戻すのも苦労だ。・・・いらで苦労してもらおうとしよう。』

『では準備をします。』

『貧乏人はやることがギャンブル臭くてやになっちゃうよ。』

僕はQB、最高神と呼ばれる神の上位種だ。

僕は不正を許さない。

1回マークしたら不正をしている現場を押さええるまで監視を続ける。

それが僕の仕事だ。

他の最高神も役割はあるけど、僕は比較的暇な部類だね。

そんな僕だけど、最近面白いものを見つけてね。

あの墮落した神に利用されるなら僕が保護したくなるぐらいそそる人物だね。

安齋千代美。

彼女の前世は実に勿体無いことこの上ない。

彼女は馬鹿者を装った。

周りと同レベルを合わせるために。

『彼女の本来のレベルならアンツイオ高校のノリと勢いによる攻勢ではなく一撃離脱散会戦術が本来の姿だと僕は観ていて思ったよ。・・・奇策を取るしかないアンツイオ高

校の戦車で、自分の本当に欲している駆逐戦車を後回しにして、高校に合った戦車を調達したのはどんな思いだったんだろうね。．．．プロリーグに進んだのなら彼女は戦車道のイチローの様になっていたのに。引退後は西住や島田に対抗しうる新流派を創っただろう。勿体無い。』

『僕は神様、そんな者に可能性を与える存在。願わくば．．．健全に生きてほしい。新しき世で。』

「はいはっ。」

『脱落者部屋．．．．．でも言えば良いかな。僕には上手く説明できないや。』

「神が何を言ってる。．．．若いの、ここに座れ。」

私こと西住まほは戦車道、西住流師範の座にプロ10年目で就任し、40で他界した。

死因は事故．．．．．と言いたい但他殺だ。

ダージリンの運転に殺された。

社長のアンチヨビ

戦略の中

私は国外に脱出する際、巨大な時限爆弾をダキアに埋め込んだ。

大王国の大商人に激安価格で土地を譲り、動かせる資産の半分ほど融資したのだ。

国際関係が絡む以上接收することは今のダキアには無理であり、大商人達はロシアで成功した傲慢な商売をしてくれるだろう。

まあ私には世界中広まり、売れている自転車と靴、町長時代に40%ほど抑えたトウルチャの各企業の株と配当金がある。

それだけあれば合衆国でやれるだろう。

「なにより、私にはこれがある。」

何重に巻かれた紙。

そこにはアメリカの地図がびっしり書き込まれていた

ニタア

「やるぞ、私は祖国の為に。」

く合衆国 ニューヨーク市ハーレムに当たる街 ミレムく
亡命した私はすぐに動いた。

まあ動かざる得ない環境だったんだがな。

今のミレムは発展途中で新参者に優しい街であり、治安も良かった。

この街は旧大陸の渡航者が多く住み、インドア王国（イタリア）系の住民が渡航者の
半数を占めていた。

「ああ、久しく食べていなかったな・・・最後に食べたのは何時だったか・・・ピザ、パ
スタ。」

「・・・振る舞うか。久し振りに作ってみたいからな。」

私は今いるメンバーに向けた食事を作り始める

貴族のアンチョビ自ら料理を作る姿に、少々不安そうな顔をする部下の面々だった
が、料理が出てくると不安も晴れる

「旨そう。」

誰かが呟いた通り、ダキア風のアレンジしたピザ、パスタは部下の嗅覚を刺激する

「頑張った奴に振る舞ってやるぞ!!これからも私を支えてくれ!!」

「「おお!!ドゥーチエドゥーチエドゥーチエ!!」」

なんか・・・アンツイオを思い出すな・・・食らい付いているのが年齢も性別もバラバラなのを除いて・・・。

「え!?同志アンチヨビ!!企業を経営するのですか!!」

共産被れの元囚人が大声で言う

「落ち着け。」

私は試作品のハンバーガーを彼の口に入れ込む

「モガモガ・・・!!」

「どう?」

「・・・美味しいです。ただ我々には少々脂っこいです。」

「なら良い。・・・私はこれを使ってセルフサービスでアメリカの金を集める。」

「アンチヨビは反革命主義者だったのですか!!」

「そもそも私は共産主義者ではない。愛国者だよ。どこまでも自国民の為に動く。共産主義だろうが帝国主義だろうが、資本主義だろうが国民が最優先だ。国民が望む国を作るのが私の役目だ。貴様もそうだろう?」

「わ、私は共産主義こそが・・・」

「少しこつちに来い。チスク、工事現場の見回りに皆を行かせてくれ。こいつの教育をする。次いでに看守や元囚人達を呼んでくれ。」

「ええ、アンチヨビ、共産主義の素晴らしさを理解してもらおう。」

「あ・・・はい。」

あれから19時間が経過した。

共産主義者達は熱弁で共産主義の素晴らしさを言い続けたが、3時間辺りでいつまで

もアンチヨビが喋らないことに疑問を抱き始め、4時間で誰かが言った

「アンチヨビ・・・様？」

「君達の熱意はそれだけなのかな？」

私の雄弁が始まる

長時間の催眠演説

元々国を良くするために活動していたのを拗らせて共産絶対主義に変わったのを
ゆつくりと戻していく

終わる頃には

「そ、ソウデスヨネ、資本主義デモ帝国主義デモ皆方豊かならソレデイイ。」

「アンチヨビ様!!ドゥーチエドゥーチエドゥーチエ!!」

「やっためう、すごいめう。」

・・・少々やり過ぎてしまったかもしれないな。

セルフサービス・・・スーパーマーケットのようなものをイメージしてもらいたい。私は初めは飲食店を経営しようと考えていた。

しかし、周りの様子を見ると、飲食店でゆつくりと寛ぎながら食べられそうな客層は少なく、忙しく働く労働者が殆どだった。

そこで、私はマク○○○ルドを元にした物を作ろうと考えた。

金が有るので店を作るのは楽にでき、キッチンは工場のようにラインが組み立てられ、早い、安い、ポリユーマーなハンバーガー店が出来上がる。

まあ、種類は5つしかないがな・・・ポテト作りたかったなあ。

あ、名前はアンチヨビバーガーだ。

うん。

ダサイからAバーガーでいこうと思ってるよ。

グスン

結論から言えば数週間で地域の軽食業者を駆逐した。

と言つても、ただ潰すのではなく吸収したと言えば良いか

私は撤退する彼等を説き伏せ、Aバーガーの周りに店を作るようにさせ、商品が被らないようにさせた

それを囲むように本業の自転車と靴工場を作り、スーパーマーケットを作った。

ここまでで約半年

持っていた資金の7割りを使ったがすぐに元は取れるだろう。

あ、次いでにコ〇・コーラと契約してAバーガーにコーラが販売されるようになったぞ。

「私に融資しませんか。」

私はジョンと言う老人に接近した。

ジョンは教会の門番だ。

ジョンは微笑みながらこう言う

「お嬢さん、詐欺には手を出してはいけない。」

私は言う

「私は目標がある。合衆国に根を張ることだ。」

ジョンは言う

「私にも若い頃目標が合った。100万ドルを貯めることだ。」

私は言う

「私は面白い自転車を作った。」

ジョンは言う

「面白い物とな。見せてくれ。」

私は言う

「貴方はこれを見ると魔法がかかったかのように金を渡してくれるだろう。」

ジョンは見る

自転車に付いたエンジンを

「友よ幾ら欲しいかい。」

私は言う

「400万ドル欲しい。私は貴方と悪魔の契約をしたい。」

ジョンは言う

「悪魔とな？」

私は言う

「この国を外人の私が変わってしまうから、私は悪魔だな。」

ジョンは言う

「面白いことを言うお嬢さんだ。私は何かかね？」

「ジョン、石油の王様、吸収の天才。」

エンジン

私はジョンから得た資金を全て使って、この時代でも使えるセルモーターを開発し、これを基礎として特許を取得する。

ホ○ダのカブA型を目標に定め、スコット式2ストロークガソリンエンジンにセルモーターを発展させるのに1年、生産工場にダイキャスト製法、ライン製造法といった当時の最新製造法（今後メジャーとなる製造法）を導入し、大規模な工場を作るのにこれまた1年かかった。

「さあ、攻撃の開始だ。」

攻撃目標こと、ライバルはモペッド（自転車にエンジンをくっつけた物で、カブことカブAと命名されたアンチョビの力作の4世代くらい前の性能しか出せない原チャリ）と来年発売されるであろうフオードT型と定め、1年間でどれだけシェアを奪えるかがアンチョビの将来を左右する。

アンチョビは話術だけでなく、大衆心理も心得ていたので、これを販売に利用した。

ダキアで成功した靴の売り込み方法をカーブAも同様の販売方法をとリ、グループ社だけで販売するモペットに取り扱っている店舗数で圧倒させると、デリバリーサービスにカーブAを使う様にし、様々な人に見てもらうことにした。

デリバリーサービスは私がエンジンを試行錯誤している時期に、自転車を置いて開始し、1年半が経過した今はミレムだけでなく合衆国の北部3州に浸透していた。

それはアンチョビバーガーが有る地域を示す。

まさに宣伝だ。

ミレムで作られたシューズに制服を着た若い男性がかつこよくカーブAに乗って自宅まで食べ物運んでくれる。

カーブAはアンチョビの会社が製造した安全自転車があれば格安でエンジンを付けたカーブAに替わるので中産階級から労働階級に浸透していく。

売り込みの方法はまだある。

郵便局に使用してはどうかと町長に助言し、ジョンに「現代型の」ガソリンスタンドシステムを提唱し、完全にバックに付かせることに成功した。

つまり、今までは亡命貴族の嬢ちゃんや地域密着の商売で稼いでいるという認知だったのが、末席ながらサービス女王の地位に就いたと言われるようになる。

王……私はこれをアメリカ政府に介入できる力を持つ存在と知っているからこの力を政府……ではなくもつと効果的な場所に使うとしよう。

流石正義と自由の国。

まあその自由と正義感を最大限利用する私は悪役かもな。

「我々に何か様ですか？」

警戒心バリバリの3人の記者。

大手新聞社の重役達だ。

こいつらを味方に付けないとジョンみたいに泥棒男爵呼ばわりされるからな。

ジョンがバツクに居るから余計に警戒されてるし、スキヤンダルを探しにチラチラ工場に来るからな。

「私と飛躍しないか？私は君達の仕事である新聞は人に希望を与えると信じている。まあこれだけなら詐欺だが、私は君達に提案するよ。」

「何をですか？」

「広告を頼みたい。商品ではなく求人広告だ。」

「求人広告?」

「どの様な物ですか?」

「人の人生を広げるシステムだよ。求人広告に店の場所とそこで何ドルで雇い、仕事の内容を簡単に書く。現場に来てそこから面接して雇うか決める。そんなシステムだよ。」

部数が稼げそうだと言う目をしてる・・・釣れたな。

「求人広告費として会社からお金を貰い、値段によつて配布する広さ、枚数は事前に提示する。これだけでも新聞社儲かり、部数だけでなく会社も儲かる。」

「素晴らしいな。・・・それだけではないのだろうか?」

「広範囲に新聞をなるべく早く配つて欲しい。我が社のカーブAを1台当たりを安くするから買って欲しい。どうだ?良い取引だとは思わないか?この会話を新聞にして結構だ。別の新聞社にも同じ条件をしたいからな。・・・だが、それだけ伝わるのは遅れるからイメージは有利に働くだらうな。」

「・・・流石としか言えんな。我々新聞社は貴女の提案に協力する。」

「我が社もだ!!」

「では今後ともよろしく。」

「」

会合

20歳という節目を過ぎても成長を続ける私は、広告という経済における矛を駆使して、他のモペッドを造っていた企業を早々に撤退又は駆逐し、フォードT型の出鼻を挫くことに成功した。

前世でいう西暦1909年の夏は私にとって忘れられない3ヶ月だった。

既に合衆国の東海岸では知らぬものがない富豪・・・いや、大富豪になっていた私は、魔導宝珠を運送業で使用するという名目で魔導宝珠を製造する研究所を買収することができた。

だが、あまりに製造するためのコストが高いので、本来なら名目だけで使う気は無かったのだが、配達で私が試作した箱形演算装置を使用させてみたところ、お客に好評で、魔導宝珠の赤字分の補填にはなつたため、継続してみることにした。

まあ、実用のデータが録れるから無駄ではないな。

これは嬉しいと言えば嬉しいが、一番嬉しいことそれは・・・フェドロフM1916と同じ性能の銃が合衆国軍が仮採用をしてくれた事だ。

まあこれはIMIガリルのための資金稼ぎ用のダミー銃が採用され、アンチヨビグ

ループが銃のブランドとしても実力が有ることが世間に示す事ができた。

これでIMIガリルを量産してもフウドロフの進化系と言えば使用者に安心感を与えることができる・・・と思う。

・・・そろそろ準備を始めるべきか。

伊土戦争に似た大戦がこの世界では1年早く起きそうな気配をみせている。

「私は戻れないが・・・そうだ。ヘス看守長に部隊を送らせようか。実戦訓練にはなるだろう。・・・何よりヘスの実力を確認したい。」

モデルがいない人物がどれだけ活躍できるか知りたかったため、私はヘスに最新式の箱形演算装置とIMIガリル、私に忠誠を誓った魔導師70名を彼に与えた。

ジョンに誘われ、会合なるものに連れていかれた。

そこは裏の政府と呼ばれる経済界の重鎮が座っていた。

「ようこそアンチヨビ。民族を越えて我々は金が有るものを歓迎する。」
「そりやどうも。」

会合は独占に關しての事が多く、業種の多角化を進める私にこれ以上利益を侵害して
くることの無いように楔を刺す意味合いが大きいと感じた。

勿論私は現状の利権には手をつ突つ込む気はない。

しかし、私はこれだけで止まるつもりもない。

今年設立されたボーイング社の株は買い込んだ。

それと同時に10万ドルの投資をし、早く爆撃機や輸送機を造らせ、ダキアの強化を
させるように動いた。

そんなある日、私が何回目かの会合を終え、自宅に帰ろうとした時、路地裏で何か感
じるモノがあり、スーツ姿でそこに向かった。

「……ケイ？」

ケイ

「・・・？誰？何で私の名前を知ってるの？」

目の前の少女は幼く、弱々しく壁に背中をつけ、もたれ掛かるように座っていた。

「ビンゴか。・・・暗くてよく見えないか。どれ。」

光学術式を発動させ、顔がよく見えるようにする。

「全く、旧友を忘れるとはな。寂しいぞケイ。」

カタカタ

「あ、あ・・・千代美か!!」

「久々に日本語を聞いたな。そうだ。今はアンチヨビ・・・アンチヨビ・サン・ホテロという元ダキア貴族の娘たがな。」

「う、うわああああ!!」

「ど、どうした!？」

錯乱状態のケイを落ち着かせ、チスクに言つて車に乗せた。

何でも一般的な家に生まれたが、父親の会社が破産すると借金取りがやって来て一家離散状態になり、信用してきた親族や近隣の人達も金が無いとわかると手のひらを返し

て冷たくなり、路地裏で必死に生きてきたらしい。

可愛そうだと思うが、貴族社会、海外の生活、町長としての活動、経済界等富を持つがゆえにケイの父親のような敗者を星の数程見てきたアンチヨビはうろたえることもなく、堂々と言った。

「社会にフェアプレイなんて無い。ケイ、フェアプレイ精神は自由の国である合衆国：いや、今の時代どこに行っても生きていけないぞ。まあチャンスはあげるがな。」

ペラつとパンフレットを4枚渡す。

傭兵募集、工場作業員募集、受付募集、下働き募集の4つ。

「傭兵・・・戦車には乗れる?」

「・・・ああ。」

ケイは迷いなく傭兵の募集を選んだ。

傭兵といっても私のシークレットサービスだったり、魔導師達を訓練する組織だったりと小さな組織に分割して戦力を保有しているように見せていないが、今の段階で5航空大隊、2個歩兵中隊、3砲兵小隊を保有している。

現在精鋭部隊がイルドア王国に向かっているのも合わせればもう少し増えるがな。

パチン

「戦車の指揮ができるのがいてよかった。」

コプコプコプ

「それほど戦車というのは戦争を変えるのですか?」

私はコインを机に弾くように置き、チスクは私用のワインを注いでいた。

「簡単に言えば移動トーチカだからな。」

「私には軍事兵器の事はさっぱりですが……。」

「チスク、外交でも兵器は有効に使える。例としては合衆国の砲艦外交だな。戦艦という自国の国力を現す物で力の差、圧力で交渉を有利にできる。」

「なるほど。」

まあダキアの国力では戦車でも駆逐戦車を造るのが精々だな。

ヘツタンことヘツツアーやフランスの Renault UE57のような安くて簡単に製造できたり、トラクターの改造車を使うしか道がなかった。

「貧乏とはやなものだな。」

謀神

「チスク、そろそろ動く。この計画書を持つてダキアに戻れ。」

10カ年計画と書かれた書物には外交、内政、国家戦略が多岐にわたり書かれており、合衆国で稼いだ金をトウルチャに投資し、増えた海外の企業を上手く活用してダキア経済の飛躍と来るべき戦争の為の国力を増大させるための計画だった。

「私もここを離れ、海外を飛び回る。．．．ジヨジヨと協力し、ダキアを頼むぞ。」
「はい。ドゥーチェもお気をつけて。」

「統一歴1913年9月24日．．．か。」

「手が止まっているぞミス・アンチヨビ。」

「失礼チャーブル。ダキアとアルビオン連合王国の関係を考えてね。」

「そうか。」

このチャーブルは史実のチャーチルで現在は海軍相の地位にいる大物政治家であり、私の友人である。

「しかし・・・連邦の革命はチャーブルにとっては嫌だったか？」

「ああ、やだね。だが、その親玉を上手く操り、国益にしようとする政治家は尊敬できるよ。」

「あら、上手いこと言うじゃないか。・・・合衆国から離れてはや2年。そろそろ私もダキアに行かなくてはならなくてな。」

「最後のチェスになるか。・・・悲しいものだな。どれ、お気に入りのワインを開けよう。」

「チャーブルの選ぶワインは旨いから好きだ。ありがとう。」

「それで、ダキアの軍部は掌握したのか？」

「元々裏の組織としてダキア青年将校研究会と鉄衛団がある。こいつらは私のシンパだ。代表はコルネ・コドレアとホリア・シマ、参謀内部には切れ者のイオン・アントネスクもいる。」

最初の2人は使える政治家で、私と実際に共和国で交流したこともある。

イオン・アントネスクは史実と同じ名前で、史実より階級は低い。（私が事前に農民の蜂起を経済の力で抑えたため活躍していないから）

しかし、手紙でラブコールを送り続け、なんとか協力関係を築いた。

だが、ダキアの経済が好転しているとはいえ、貴族社会は様々な弊害があるため、血の粛清を行おうとしている。

「しかし、共産主義者まで支配しているとはな。アンチヨビ、貴女のカリスマはどうなっているのだ？」

既に合衆国にいた頃、私の手により極右政党ファシスト党、右翼政党国民戦線、中道右派民主党を組織させ、地下組織として中道左派共和党、中道寄り左翼社会主義党、左翼共産主義党もチスクを経由させ組織させた。

極左の革命戦線は流石に制御できてないが、革命時には協力するように手はずしてある。

「まあ社会主義にも良いものは取り入れなければならぬほどこちらは小国だからな。・・・はあ、貧乏とはやだよ。まったく。」

「海外資本は連邦の革命の時のように摂取しないだろうな。」

「あの時は知られてないが、革命政府に対価を支払ったんだぞ。文句を言ったら機密情報や白軍支援等もちらつかせて抑えたがな。」

「ふん、今回ダキアの革命に5カ国も協力させてよく言うわ。」

「共和国は正直協力を取り付けられるとは思わなかったが、選挙や革命本場のあの国ら

しいと言えばそうだがな。」

「で、帝国は。」

「戦争準備に入ったな。まったく。覇権国家なんて地政学的に無理だろ。できるとしたら海洋国家か連邦くらいだろう。」

「秋津島皇国もか?」

「あれは政治で、覇権は無理だ。どんなに科学力や国力が増加しようとも政治で自壊する。経済界はどうかはわからんがな。」

「となると、あの植民地人達が覇権争いに来るか。」

「戦争で旧大陸が疲弊すれば野心を剥き出しにするだろうな。私はその覇権争いを綱渡りで行き長らえなければいけない祖国を思うと泣けてくる。」

数日後、アルトゥール帝国（正式名称）・・・ライヒ帝国にて参謀総長モルトケと会話後、革命に移る。

總統のアンチヨビ

ダキア革命

〔統一歴10月20日・・・帝都ベルン中央駅〕

「モルトケ、紙に書いた通り5カ年の不可侵、戦略物資の格安での輸出は約束しよう。」

「ああ、アンチヨビ、成功を祈っているよ。」

連合王国、共和国、帝国、合衆国、連邦それぞれの支援をちらつかせ、穏健な条件で最大の支援を引き出すその形相はまさに悪魔であった。

「さあ始めよう。革命を。」

14:39

その列車は封印列車と呼ばれ、窓は全て木で塞がれていた。

関係者150名封印列車にてダキアに到着。

10月15日

とある農民が重税を公王に知ってもらうため直訴。
その農民は処刑され見せしめとなる。

10月17日

ダキア全体で農民の蜂起

右派各政党はコルネ・コドレアとホリア・シマを臨時首相、副首相とした臨時政府をトウルチャに設置。

既にトウルチャは各国の企業と工場が犇めく一大生産地であり、その周辺をアンチヨビの命令で速やかに勢力圏内に組み込んだ。

勿論モレニ大油田も臨時政府が早急に制圧する。

公王はすぐに反乱鎮圧命令を軍に送る。

「もう遅いのだよ。．．．ダキアよ、立ち上がるのだ!!」

イオン中佐率いる青年将校達が臨時政府側につく。

10月19日

第一王子率いる近衛師団がイルドア王国とメフメット帝国の戦争にて活躍したヘスが指揮する臨時政府軍第一航空連隊（1大隊32人編制 戦争にて2名死亡4人退役）と機械化（自転車や軽トラック、原チャリ混合部隊）の機動？戦により3時間の戦闘で近衛師団は壊滅。

青年将校達は機械化と空からの3次元攻撃の有効性を実戦で証明するに至る。

く農民が蜂起している地域の駅く

黒色のトレンチコートにシルクハットを被ったアンチヨビは駅に降り立つ。

「アンチヨビ様!!」

オオオオオオ!!

オオオオオオ!!

「万歳!!」

農民蜂起を指示していた者や労働者達が歓声を挙げる。

「愛すべきダキア国民の諸君!!私はこの地に帰ってきた!!」

「この蜂起は革命だ。革命により腐敗した貴族社会を粉碎し、新なるダキアを作るのだ!!」

「手のひらを見てください。」

「皆形が違いますね。」

「そう神が作られたのです。」

「では聖書に公王は国民を奴隷にしていると、支配してよいと書かれていますか?」

「答えはNoだ。」

「では、今の政府は誰が正しいと証明しよう。」

「そうだ!! 誰も証明できない!!」

「革命は国民の意思だ。生きるものの声だ。言葉だ。感情だ!!」

「この革命は私が証明しよう!!」

「そしてダキアを・・・列強に持ち上げよう!!」

オオオオオオオ!!オオオオオオオ!!オオオオオオオ!!

「リーダー!!我らがリーダー!!」

この瞬間革命は成功した。

第一次アテネ・ブルリア防衛戦

革命は計画的に行われた。

近衛という切り札の壊滅と指揮をしていた第一王子が戦死という情報は貴族社会に凄まじい衝撃を与えた。

まあ私の家族は革命開始初期に合衆国に亡命させたがな。

何だかんだで肉親は大切に思うのだな。

だが、両親にはもうダキアの土を踏ませることはしないと決めていた。

「国外に逃がすな。富はダキア国民の血と汗でできているのだから!!」

到着した臨時政府ですぐさま首相の地位を渡された私は総統と名乗ることにした。

半日でダキアの国境は臨時政府に忠誠を誓った軍と親衛隊で固めた。

そして公都に合衆国で製造したトラクターを改造した自走砲と色々技術的に問題があるため短距離をノロノロ走る戦車擬き（ルノーとかI号戦車擬き）を親衛隊が率いて堂々と侵入した。

「これでもくらいやがれ!!」

貴族の男子だろう。

私に向かつて旧式の機関銃で攻撃してきた者もいたが
ガキン

私は魔導師だ。

トツプクラスのな。

銃が効かないことに恐れ、腰が抜けてしまった男子を散々搾取されていた町民達はこ
こぞとばかりに殴りかかった。

ザッザッザッ

鉄と灰色の兵士達の行進は城に着くまで続いた。

「全体停止。ここから先は私の時間だ。」

「やあやあ公国の重鎮の方々が勢揃い。ここまで歓迎してくれるとはね。」

「黙れ反逆者風情が。貴族としての誇りもないのかね!!」

玉座の前には追い詰められた大物貴族達が勢揃いであり、今だ公王は豪華な椅子に
堂々と座っていた。

「ダキアの国政は止まるぞ。この反乱でダキアは他国と10年の差がついた。アンチョビよ。これをどうするつもりなのだね？」

「なにが10年だ。もうそんな責任を擦り付ける事で採める時間は無い。近隣列強の同行は日々悪化している。戦争も20年以内に起きるだろう。だから私が動いた。民無くして何が国家だ。」

「まあ私も悪魔ではありません。国内にある全資産を臨時政府に譲ることで他国に亡命させましょう。ライン川周辺地域になら家もつきませんがね。」

結果、公王一家は連合王国に亡命し、半分以上の貴族が共和国と帝国に亡命、一部反対した者は一家まるごとギロチンにかけた。

「『……』」

貴族の一掃を果たしたアンチョビはダキア議会を成立させ、7政党が各々主義を主張するようになる・・・が、ダキア政府としてできた閣僚は表向き主義主張を無くした統一内閣だったが、アンチョビと何かしら関わりがある人物達だった。

その人物達が黙っている理由は3つある。

1つは誰もアンチョビが諸外国から貰った支援が膨大であり、武器やある程度の機械類は当分困らない事。

2つ目は魔導部隊、機械化部隊や初めて実戦に投入した戦車の将来性。

3つ目は貴族が溜め込んでいた資金が予想よりも膨大だったことである。

「これでダキアは飛躍できるぞ!!」

第一次アテネ・ブルリア防衛戦2

「さて、我々は革命による新政府ができた訳だが……少々文句があるもの達が居るらしいな。……南部国境線が突破された。」

ザワザワ

大国は秋津洲皇国以外全て独立保証を獲得していた（アンチヨビの神外交）ため、昔の共和国の革命や連邦の赤化革命のような外部からの介入は起こらないと楽観視していた旧臨時政府の主要メンバーだった者達は衝撃だったが、アンチヨビ以下側近や革命によって国内に帰ってきて政府に参加した者達は当たり前のように受け取っていた。

「アテネ（ギリシャ）が信用できるとでも？まあこの背後を燻らせてきたがな。」

アテネ・ブルリアという小国2カ国の背後の大国……もう残りカスのように弱っていたメフメット帝国で親ダキア（親共和国、親合衆国派）を武装蜂起させ、アテネに武装難民を送り込んで全力でこちらにこれないようにもしていた。

「なに、少女の将軍とアントネスク大佐がやってくれるだろう。」

「戦車の威力……とくとご覧あれ。全車両発進。」

ケイの戦車乗りとしての経験はこの時代の3世代くらい先まで出来上がっており、アンチヨビが拾って栄養失調状態が改善してからは、現実可能なスペックまで性能を抑え、拡張性があるよう設計した戦車を紙に書き、会社内で部品を密かに作らせ、組み立て、秘密裏に訓練させていた。

まあ、現状では歩兵の支援にしか使えないが、私が前世で扱ってきた大馬力エンジン……は材料と技術不足でできそうにないが、試作エンジンは安定して100馬力が出せ、今の時代では破格のエンジンが量産に移りつつある。

「早くシャーマンにしてもらいけど贅沢は言えないもんね。」

そもそも戦車の実戦運用なんて世界で初めてであり、鉄の怪物が突入してくるだけで敵の兵は士気崩壊を起こして逃げ出してしまい、そこをアントネスク大佐が率いる歩兵が追撃し、背後には第一航空連隊が機関銃で掃射、僅か数分で進行してきた軍は殲滅された。

「・・・捕虜が取れたら最高だったんだがな。」

敵部隊の消滅報告を受けたアンチョビは即座にアテネ・ブルリア両国に講和を打電、仲介者は連合王国に依頼した。

「まあ、アテネは破産しない程度に筆り取るがな。」

賠償金、格安の鉱物資源というやさしめの条件で講和が結ばれた。

「ここら辺が落としどころでしょう。」

プーハー

「連合王国としては戦略上重要なアテネがダキアに取られることだけを阻止するように言われていたから楽だったがな。」

「チャーブル、東欧は任せろ。共和国の連中は連邦を信用できてないが、なかなか面白い男がいたからそいつに国取りをさせようと思う。」

「連邦は帝国の後に必ず潰さなくてはいけない相手だ。」

「連邦はなにもしなくても自壊するぞ。食料不足でね。」

「ちなみにだがダキアの来年度の食料生産量はどれくらいになるんだ？」

「改革して混乱すると思うから落ち込むだろうな。まあ再来年には今の2.5倍にするつもりだがな。」

「期待してるぞ。」

1の矢

「さて諸君、内政の時間だ。まずは・・・農業と軽工業をやるぞ。」

トウルチャを工業特区に指定したが、トウルチャにある工場は主に重工業であり、軽工業はダキアの各地に転々と元国営工場があるだけだった。

「農業と重工業は資本主義的でいくが、軽工業と一部第三次産業は社会主義的でいかせてもらおう。・・・カール大臣（カール・カウツキー　ダキアに亡命　以後地下で活動　現社会党件アンチョビ内閣の工業大臣）、後半は好きにしろ。ただ海外企業には手をたすなよ。」

「ほっほっほっ・・・任せんしやい。なに、選挙ができるくらいには安定させるから。」
「頼む。・・・さて、まず農業から我々は手をつけよう。金と合衆国から呼んだ農業系技術者にトラクターを普及させたり肥料を注ぎ込んで資本集約度を上げ、大規模農業にさせるぞ。幸いこの国は平野が有るからな。」

実際ダキア（ルーマニア）は資本さえ有れば欧州有数の穀倉地帯に化ける可能性を秘めている。

史実では社会主義による計画経済で資本ではなく労力を集中させる集団農業にさせ

たため混合農業の割合が少なかった。

「穀物は我が国最大の武器だな．．．全く。」

皮肉も込めた言葉を呟きながらアンチヨビは自室に戻り政務に励む。

「むむむ、こんなものが出来上がるなんて!!素晴らしい!!きつと世界規模で戦争が起こつたらこれが歩兵の盾に．．．いや?移動できるからそもそも攻撃に．．．これに航空戦力や魔導師が加われば．．．おお、点、線という1次元から面にと来て、3次元の戦争．．．世界の最後の戦争になるな。」

全世界でまだ移動トーチカ程度にしか．．．いや、運悪くアテネの砲撃に簡単に壊れた戦車が大々的に知れ渡つたため、装甲車の方が役立つと世界中で思われるなか、連合王国経由で極東に位置する島国の秋津洲皇国のある中尉が興奮していた。

名は莞爾という男はダキア語の辞書をすぐに注文し、アンチヨビ宛に手紙を書き始める。

ダキア語を暗号と勘違いした検閲官は内務省、陸軍に解読と莞爾のマーク強化を依頼することになるが、結局莞爾の手紙はダキアに送られ、運良く（悪く）アンチヨビが読むこととなり

「・・・思考が完全に戦後の21世紀の右翼だ。戦車と航空機、とどめに原爆を考えてる。・・・石原莞爾か・・・在ダキア武官に招待して語ってみたいな。」

後に実現することとなるが、一緒になぜか付いてきた永田鉄山という男達の扱いで苦労することになるのはもう少し後である。

2の矢

「内政計画は大切だが、我々は国防をより強固な物にしなくてはならない。」

現在仮想敵国は帝国と連邦、それに勝つて鎖を付けたとはいえ、油断できない2つの小国これ等から国を守る為には軍を再編し、近代化させる必要がある。

その為にまず60万人という国力度外視の兵を解雇しなくてはならない。

指揮官は残すが、半農半兵状態のよくわからん奴らは直ぐに解雇した。

・・・解雇に反発して暴動が起これると思つたが、解雇されて喜んでいるのばっかだつたな。

・・・で、残つたのは約16万人・・・8師団創れるな。

この中には魔導師の才能が有る者も含まれており、総数は500にもなる。

現在は第一航空連隊を解体し、その人員で空軍を発足させた。

演算宝珠の数が足りないので共和国からフルマン I I I を5機輸入し、3機を練習用に、残りは技術の蓄積のために民間企業に安く転売を行った。

特にエンジンには50馬力とアンチヨビ製の100馬力より低いものの、後の化け物エンジンの下地となる。

「しっかしまあずいぶんと酷いものだな。明治維新の時の偉人達も同じ様に思ったのかもしれんな。」

ボソツとアンチヨビは呟き、次なる一手のためにとある事務員に手紙を送る。

『どうだい。そろそろ返事をくれないか。』

と・・・。

「おお!!飛んだ。」

ダキアでは飛行機を見たことも無かった者が多くいるため空軍は試行錯誤の連続であった。

1機当たり2126万円する航空機を運転する者は合衆国からアンチヨビが連れてきたパイロットに教官を頼んだが、報告を聞くと役に立つのができるまで10ヶ月はかかるとの事だったため演算宝珠の件の苦肉の策だったために頭を抱えて考え込むことになる。

「仕方がない、ポケットマネーで赤色空軍擬きを創るか・・・はあ、本当は自動車工場用

だったんだがな。・・・ボーイングの連中なら喜んでくるか？いや、ここは利害関係から他のところからも引つ張らないと・・・ラット（ライト）兄弟のところから引つ張るか。・・・ああ、カーチスも噛ませないといけないな。」

アンチヨビの空軍構想は未来ダキアに技術をもたらしたと言われるが、大誤算から始まったものだった。

「ふーん、アイツも頑張っているじゃない。」

バサ

「私達も彼女に負けないくらい頑張らないとね。さて、ウクライナをパルチザンから取り戻すわよ!!コサツク!!突撃開始よ!!」

「「ウラアー!!」」

赤い国でカチューシャは赤軍将校として生きる。

その活躍により殺されとも知らずに。

3の矢

革命から1年経過した時、フォードとの和解をした。

・・・それは合衆国の経済界にとつともない衝撃を与えた。

「それで、このフォードに何を求める!!」

「勿論車だ。次世代は車の時代になる。今我が国では技術がない。だからフォード、金はやる、車をダキアで造って売ってくれ。」

「サービスの女王、俺様がダキアに直接乗り込んだのだぞ。100万台だ。この国で100万台造ってやる。買えよ。アンチヨビ!!」

「仮にも国家元首だぞ。・・・まあいい、支部を早く作れ、土地は用意してやる。」

この衝撃はダキアに追い風となった。

合衆国の経済界との癒着が切り離す事ができないくらい強固な物になったため、準同盟関係にまで関係を深めることができた。

更に合衆国にとって悩みの種であったイルドア王国系の移民もダキア方面に流れてくるようになったというのも民衆の心理は良い方に傾く。

そして新たなフロンティア（市場）に欲望を抑えられない者からダキアに次々と工場を建て2つの帝国や周辺地域に輸出を開始した。

その姿はアジアニーズと呼ばれる国と同じ現象であった。

合衆国の経済が浸透すれば、既に居た旧大陸系の国々も黙って市場を取られるわけにはいなくなり、国を上げて資本を投入するようになる。

「これでダキアはゲーム盤にある小国ではなく、中国のNPCくらいにはなったな。」

とアンチヨビは言うが、旧大陸のパワーバランスを握る一国に革命から僅かな時間になれるとはどこも思っていなかった。

・・・で、これに欲を出した者が存在した。

連邦だ。

連邦は大胆にもダキアに第三軍25師団の50万人を投入し、国境を越境し始めた。

「友人はこの話に乗ったか。……さて、あいつのかわりに肅清の手伝いでもしますかね。」

ダキアはいまだに小国である。

アンチヨビを含めてようやく中ぐらいの国になる。

革命後からの経済再編、農業再編、学業改革、軍事改革は学業改革以外は順調……他国から見ると農業は失敗しているように見えるが国力的には驚異的な伸びを見せていた。

そして今回の連邦進行に関してもアンチヨビは何重にも策を置いていた。

1つは連邦の弱体化。

革命時の名将が今回攻めると知っているので、それを殺すことでその将の派閥を消

す。

既に友人から進行ルートを手紙で聞いているためこれが策だとしても他国を巻き込んで大戦争に発展させるだけなので別に良い。

2つ目は戦時体制移行時の混乱を見るためであり、官僚の有事に対しての経験を積ませる目的がある。

3つ目は溜め込んだ外貨を内外に放出することで更にダキアに経済を癒着させる。

国内で戦時バブルを擬似的に引き起こすことで企業の効率化を進める目的もある。

4つ目、いまだ村単位でいる国民をダキア国民という自覚を持たせるためもある。

農業再編が進めば自然に大半の村が消滅するため絶対に必要な事である。

5つ目、軍の実験及び共和国の外人部隊を真似て作ったイルドア王国からの亡命者を集めた外人部隊が機能するかを試す目的もある。

6つ目、国内にある海外企業にダキアの安全性を教える目的・・信用度にかかわる。

これ等を達成するため限定動員に留め、国境周辺地域で迎撃する作戦になる。

勿論他国の横槍を喰らわないように調整済みだ。

「さあ、戦争を始めよう。」

戦略兵器

さて、この時代の兵器について教えなければならぬ。

まず重機関銃だが実験段階だったり普通に弾詰まりを起こす。

爆発する。

信頼性がとてつもなく低い。

我がダキアでは連合王国で研究されたホツチキス重機関銃を提供または輸入し、技術を抜きとつたが合衆国時代に造つたブローニングM2重機関銃擬き（以後M2）の方がやはり優れていたためM2を国内配備しているがな。

革命時及びアテネ・ブルリア防衛戦の時の戦車には水冷式の重機関銃を搭載していたが今ではM2に全て替わっているから安心してほしい。

まあ技術を抜きとつたと言つたが国内配備されてるアサルトライフルのガリルはガスピストン方式だから今さら感は有るがな……。

で、ダキア以外の国に軽機関銃とかはいまだ姿は無く、ライフル系の銃が主流である。

今回攻めてきた連邦軍はコサックと呼ばれる騎兵が主力であり、タチャンカと呼ばれる馬車の中に信用性の低い重機関銃を置いた物が秘密兵器らしい。

で、こちらが使用するのは飛行船と装甲列車である。

どちらも現状は戦略兵器扱いである。

が、装甲列車はダキアに張り巡らされた鉄道網によりそれなりの数があり、こちらは戦術兵器として普通に投入した。

連邦第三軍は曲りなりにも精鋭であり、秘密協定などお構い無しに進軍する。

「装甲列車か。・・・コサツクの前では意味が無いわ!!」

いかにも連邦らしい毛むくじやらの軍人が手榴弾で攻撃する。

それを助けるように援護射撃を開始する。

「・・・全軍に通達、全線をぶち抜く。」

連邦軍は北の最高將軍ブルシロフと呼ばれる元帥に副司令官に若いながら革命時名を上げた名將たるトハチエフ中將、一部の幹部から連邦のパワーバランスを握るとされるラーヴル中將、鈍足のルツスキー等ちらほらどころではなく名將の山盛り大集合状態だった。

第三軍は国境線を突破後、9両編成の装甲列車3組が持てる火力全てを使って何とか進撃を止め、飛行船で火力支援をして圧力をかけ続けた。

が・・・

「2号列車が脱線して使えなくなっただと!？」

「はい、中に居た兵士は9割死にしました。」

「くっ・・・。」

予想以上に強い連邦軍に焦るアンチヨビはフォード社の支部に未だいるフォードの元に足を運ぶ。

「フォード、早速仕事だ。自動車を1万台軍に納品頼む。」

あれだけ啖呵切って安心しろと言ったのにと自分を恥ながらフォードに頼み込む。

「1万台だ?そんなもん」

(やっぱりだめか・・・)

「少なすぎるわああ!!俺は100万台を造ると言った!!1万くらい半月でもう出来上がってるわああ!!見たかこれがフォードの大量生産の力だああ!!」

3万台の自動車を軍に納品・・・直ぐにこれに仮の装甲と重機関銃を取り付け前線に出す。

前線では塹壕戦に移行させた。

が、ここで塹壕戦の経験があるのはダキアではなく連邦であり、コサツクは封じたが時間をかけすぎたため遅れながらも連邦に重砲部隊が到着した。

死なないためにダキアの塹壕は広く深く複雑になっていき、この戦争の生き残りが士官もしくは高級下士官となり後の大戦でダキア兵は精鋭と世界から言われるようになるのだが、今は生きるか死ぬか・・・蹂躪されるかの瀬戸際だった。

で、使う予定は無かったが前線の悲鳴を無視するほどアンチョビも軍高官も愚かではない。

訓練不足ながら空軍にある航空機を全てに爆弾と機関銃を取り付け、民間人から志願者を募り、魔導師とともに飛ばせるだけ飛ばした。

戦車部隊もケイに指揮権を渡して出撃させる。

アンチョビは後年必要な犠牲であり、亡国の瀬戸際だったと言わせる6ヶ月戦争の前半はダキアの惜敗という形で始まる。

6ヶ月戦争 2ヶ月目

貴重な装甲列車が3本全て破壊される頃には現地には強固な塹壕線が完成していた。

戦争により1年間で蓄えていた資金は大幅に減ったものの、補給面では圧倒的に優位であり、特許がアンチヨビにあるダイキャスト製法、ライン製造法を勿論導入しているダキアの軍事工場では最高機密だった100馬力エンジンの生産が始まり、生産ラインはフル稼働していた。

農業再編の肝であるトラクター等の重機も戦争を理由に他国から輸入し、農業人口がダキア全人口の7%まで低下していたため行き渡らせるのは容易であり、改革から1年経過し、重機の扱いも程ほどにできるようになっていたため、農奴のような連中は国営工場か兵士として登用した。

やっっていることが色々巻き戻ったりしているがとにかくこの時期は国家戦略が破綻するかの瀬戸際だったので焦っていたのだ。

「・・・なあ、国産飛行機の墜落割合は今どれぐらいなのだ？」
秘書に聞く。

秘書は額に浮かぶ汗をハンカチで吹きながら答える。

「7割りです。特に訓練中に墜ちるのが多く、試作機に至っては日に7機の割合で墜ちてます。」

死者こそ少ない（魔導師が必ず複座に乗り墜ちそうになつたら脱出）が前線で稼働できているのが全体の5%未満という泣きたくなるようなパイロット不足、機体強度不足であつた。

航空企業を合衆国から優遇政策込みで誘致し、生産ラインを作らせているが機体のほとんどが実験段階であり、信用性は皆無であつた。

しかし、戦争は研究を加速させ、止まつた時計の様だつたダキアの産業、軍事の研究は知識人が国を守るために命を削る様な努力で進む。

チスクも閣僚でありながら最近結婚した妻の科学者と一緒に何かの設計図を書いて
いる。

要するに・・・ダキアの技術が戦争を機に多少は上昇したのだ。

「まあ、そろそろ連邦も退くだろう。兵站が悲鳴をあげてるようだからな。」

先に悲鳴を上げたのがこちらの武器工場だとは……。
未来では簡単に強力で生産しやすいガリルだがダキアでは更なる簡素化が求められた。

そこで銃をテイルトボルト方式に変更し、フルオートから単発もしくはセミオートまでに制限する構造に変更した。

「ガリルがSKSカービンの様なものになってしまったな……まあこれなら鋼板プレスを多用しての量産もできるから今後30年は第一線で活躍できるだろうな……まあ平時にガリルを少しずつ造っておけば良いだけの話だが……後の大戦を考えるとな。」

銃だけでなく切り札が簡単に破壊され、戦略兵器の名に相応しくないと始めた装甲列車問題も考えなくてはいけない。

「陸上の戦艦みたいな物だからな。下の2カ国は装甲列車が1本有れば進行に戸惑う程の圧力を与えるからな……重戦車でも作るか？いや、エンジンが……予想だがこの戦争が終わる頃にはコストを無視すれば350馬力は行くだろうが……。」

6ヶ月戦争 3と4ヶ月目

3ヶ月目はダキア国防軍はポトシヤニーヤシーガラツラインに防衛線が張られ、散発的な攻勢に対する防衛のみが続いていた。

「・・・キシナウ奪還の為に装甲車はどれぐらい必要だ？」

アンチヨビはダキア国防軍の上官面々に問いかける。

大規模実戦経験の皆無なダキア国防軍は防衛戦術の確立だけで不眠不休のデスマーチだっただけに真つ青な顔が今では土気色になっている。

「すぐには言わないが、ここまでは食い込んだから敵の増援が来るらしい。2個軍団6師団だと・・・このままだと喰われるぞ。」

アンチヨビの予想は当たっていた。

ブルシロフ將軍は初戦の成功を正確に解析し、ブルシロフ攻勢計画を作成し、ダキアという国で戦術実験をしようとしていた。

連邦の高官はこの計画を全面的に賛成し、実際には12師団が援軍として送られていた。

（縦深突撃なんてされたらダキアだけの問題ではすまなくなる。くそ、友人と手を組ん

だのは失敗だったか。」

その友人は戦時を理由に兵担や事務関係で権力を掌握しつつあった。

連邦のトップの1人が脳挫傷で死亡した混乱もあり実にスムーズな権力奪取である。

(縦深突撃・・・!?)

「装甲車を第3塹壕まで下げろ。そして前線部分を薄くするぞ。」

「!?!」

「今回だけは強権を使わせてもらうぞ。常識はずれの予感がする。」

・・・あれを出すか。

「第二世代戦車ティアIIの解放を通達する。50両しかないからな。大切に使えよ。」

純ダキア産となる戦車計画第二段のティアII計画は若干の傾斜装甲があるホチキス

を私は選び、エンジンを100馬力にしたせた戦車である。

選んだ理由は他にもあり内装を少し弄ればシャーマンまで進化させる時間が短縮で

きる点である。

口車戦車はシャーマンの車体を使ってヘッツァー擬きを作る計画に変更しているの

で問題なく、戦時によって現在125馬力エンジンもできている。

「・・・こちららも突破の準備を始めるか。・・・エレミア大佐。特殊兵科の準備を始める。

3ヶ月でものにさせる。作戦開始時には少将まで星の数を上げるようにしておく。」

「は!!」

「期待しているよ。」

アンチヨビの予想は的中した。

実験とはいえ戦争を終わらせるための攻勢・・・ブルシロフ攻勢はアンチヨビの戦術的再配置により空振りし、第二防衛線にある重機関銃と新型戦車の防衛を突破することはできず、6万人の死者を出して頓挫。

第三防衛線にて待機されていた装甲車の反撃により第一防衛線も奪還に成功する。

が、名将のフルコース状態の連邦は反転攻撃を開始し、1000両の装甲車が破壊され、再び第二防衛線まで後退させられることとなる。

しかし戦車や重装備、歩兵の大半は無事であり、反撃に備える。

魔導師の実力

魔導師達は戦争開始から航空機の試験で中々空を飛ぶことはできなかった。

が、戦争が中盤の4ヶ月目によくやく400名分の（一世代前だが）演算宝珠を揃えることができた。

アンチョビはブルシロフ攻勢の反撃作戦に参加した。

前線司令官はヘスではなく、元第一航空連隊中隊長だったブリュンスタッドが空軍少佐の地位で率いた。

最初からアンチョビに従ってきたダキア出身の元貴族の女であり、結婚前に逃げ出し、そのままアンチョビの私軍に参加した経緯がある。

ブリュンスタッドだけでなく何名か元上流階級から脱落した者が空軍には多くいた。

「憂さ晴らしよ。死になさい。」

砲術術式がダキアでは未発達だが、軽機関銃や手榴弾を敵上空から降らせる事で装甲車の前進を可能にしたが、弾薬の消耗が激しかったため帰還した時に陣地を奪還されてしまったが、重武装もしくはは砲術術式の発達すれば大打撃を与えることができそうである。

そんな中、火炎放射機の実戦配備が始まる。

アンチヨビの言う特殊兵科とは塹壕戦の切り札として浸透戦術を實行できるだけの練度を持つ突撃兵、援護兵、衛生兵、狙撃兵の育成計画であり、火炎放射兵も必要だが戦車に乗せることを前提にしていた。

しかし、魔導師達の火力不足の一時的な足しにするため火炎放射機が十数機配備されることとなる。

火力支援として大砲もようやくまともなのが共和国からライン生産の許可が降りた。

M1897 75mm野砲であり、連邦の野砲より劣るものの、今までのような射程外から砲撃を受け続けるという心配はなくなった。

戦争も5ヶ月目になると塹壕前に鉄条網が張り巡らされ連邦軍自慢の騎兵単独での突撃は不可能となる。

しかしこの頃から連邦軍……いや、第三軍から逃亡兵が出始めていた。

「補給切れか？」

私はそう判断したのだが、共和国からダキアに客人がやって来ると状況が変わる。

「お初に御目にかかります。ミスアンチョビ。」

「ようこそお越しくございました・・・ケレン。」

ケレン・・・元の世界ではケレンスキーと呼ばれるロシアの政治家であり、ダキアに亡命してきた。

現状社会主義でも選挙の議席数によって革命戦線以外の左翼政党の連立内閣が出来上がっており、国家元首（総統）の私とは別に副総統が内閣のトップがなるシステムになっっていることから

『民主的修正社会主義国家』

と呼ばれている。

経済は修正資本主義別名混合経済型、農業も混合農業主体の大規模資本主義型と色々カオスだが、穏健の社会主義者達には手本となる国であり、連邦と対立した社会主義政治家や修正資本主義に興味を持った専門家がダキアに移民してきていた。

しかし今回のケレンは現在連邦の首相だった人物であり、戦争開始時の頭だった奴だ。

「ヨセフ・ジュガシヴィリが議会を掌握した。書記長という職についたため私は追い出

されたわけだ。」

計画通りだな。

「私の命をやる代わりに第三軍の一部将校の亡命を許してはくれないか。」

終戦

「え!？」

「・・・入ってこい。」

ダキア兵に監視されながら黒いフードを被った女性2名が入室する。

「ほな、顔を見せなかあかんね。」

「ええ。」

現れたのはルツスキー將軍とラーヴル將軍だった。

2人が女性なことに驚いたが、ダキア語も鈍りながらもしつかり話せることにも驚いた。

「亡命は良いが、ケレンの亡命は合衆国にしてくれ。ここだと戦争が終わらないからな。」

2人の將軍は抑止力になるからこちらに置きたい。これでいいか?」

これ以上の戦争は本当に総力戦になってしまふからな。

「なに、職ならある。ケレンは社会主義の論文を学会で発表してれば飢えることはないだろう。なんならアンチヨビ系列の企業でも雇えるぞ。労働組合会長なんて手もあるが。」

心の中で現状を必死に整理する。

將軍の亡命は予想外だが友人にとつては肅清の大義名分となり、売国奴として肅清されることになるな。

で、肅清される前に反発してこちらにすればそれで良いし、来なければ肅清されて連邦の軍事力は落ちる、内乱なんてしてくれたら武器が売れるから万万歳だがな。

決着をつけるか。

「亡命手続きはしてやる。ただし目の前の障害を粉碎しなくてはならなくてな。．．．戦争が終わるまでは將軍方は軟禁、ケレンはすぐに合衆国に向かつてくれ。」

ダキア攻勢命令第4号がアンチョビの名で発令された。

2時間という短時間に砲弾が100万発（少ない 帝国なら500万発 共和国なら700万発は発射できるだろう）発射された。

この時の砲弾には煙幕弾も含まれており、一部地域で視界不全に陥る。

「頭を叩くわよ。」

この砲撃の最中に魔道師達は火炎放射器を1人用のを（魔道師以外の兵は2人1組運用だが、魔術によつて重量問題を1部解決できている）持ち、1中隊（16名）当たり4台配備されており、技術的問題点（噴射器の一部が劣化するとガス漏れを起こし、周囲に多大な被害を起こしたりすること）があつたものの原油があるダキアでは量でカバーした。

「突撃隊前進。」

砲撃終了時には連邦防衛ラインの30メートル前まで前進していた軽装備の兵が戦鬪を極力しないようにしながら前進し、前線司令部、砲撃連絡所、補給所を占領。

前線司令部司令官は抵抗したため射殺され司令官との連絡が入らなくなる。

いきなり連絡が途絶えた場所が20ヶ所もあり、司令部は混乱したが、混乱していた司令部にシュゴーと音とともに何かが近づいてくる。

「私が見ます。」

ドアを開けたカチューシャは3秒後に火炎放射による火傷で悲鳴をあげ、5秒後に炎が酸素が燃料と結合したため酸欠状態で悲鳴もあげられなくなり、10秒後には絶命する。

「司令部の殲滅完了。」

連邦第三軍は地図上から消滅する。

前線では前線司令部だけでなく後方司令部との連絡もつかないため右往左往している兵達に戦車と軽機関銃と小型自動小銃を持った歩兵が殺到し、前線は消滅。

ダキアは勢いそのまま壊走する連邦を追いかけ戦前の地域を奪還する。

和平はしやしやり出てきた世界一の大国○の連合王国が介入し、友人と約束をしていた地域よりも多くの土地をぶんどることになってしまったので、慌ててその地域を独立させ、共和国にし、連邦に編入するという謎ムーヴをした。

戦争の効果

ダキアは今回の戦争で4万人の死傷者、3000台の車両、700機の航空機を失い、国家予算丸々2年分（アンチヨビの1年間の総利益の10分の1）を使った。

得た物は国際的な地位、産業の効率化、軍の精鋭化、軍の機械化への理解、戦術の進化、連邦から格安の資源が南方2国の20倍入って来ることであった。

友人ことヨセフ・ジュガシヴィリの議会支配によりダキアとの貿易も今まで以上に活性化することも確定している。

「今回1回だけだが、浸透作戦は成功した。問題点も有るがな。」

「空軍としては航空機の性能の向上と敵に魔道師がいた場合の訓練を進めます。制空権が無い場合我々は一方的に攻撃されることになるため陸軍でも対策お願いしたい。」

へス空軍大將はそう言い切る。

「無論陸軍としても進めるが、まず大砲の国産化を急がなければなりません。共和国基準の75mm口径弾で統一しますが、もし次の戦争になれば75mmの破壊力では連邦や帝国の火力に負けると思われます。今回の戦争で戦列歩兵が現代戦に対抗できないこともわかり、最終攻勢の突撃隊を編成し、塹壕及び敵の重要拠点の占領を目指しま

す。」

アントネスク参謀総長（階級は大将 戦争にて昇進）

「戦車は多用途目的戦車・・・中戦車もしくは主力戦車と呼ぶことにし、歩兵支援車両の駆逐戦車を製造予定になりました。戦車には全て最新の300馬力エンジンに変更し、5年以内に200馬力向上させ、攻守ともに活躍できるようにします。」

ケイ全戦車隊作戦及び製造管理隊長（階級は少将）

「よろしい。軍に關してはそのまま継続して励むように。」

問題は農業だな。

「チスク、各国から農業研究者を集めるように頑張ってくれないか？合衆国はこの計画には絶対反対するから帝国や共和国が中心だと思うが。」

穀物を国家戦略の柱としているアンチヨビにとつて、資本を集中して大規模農場にしたは良いが、品種改良がまだまだ未発達なダキアでは成果も予定より下回っている。

いな、戦争で連邦の1つ軍に国家の存亡が左右されるほど国力がないダキア、農業だけでなく工場も港も鉄道も道も電力も足りない。

「黒海に隣接する都市を中心に巨大コンテナートを作ろう。経済特区も作り、外資を集め、技術を盗むぞ。・・・そうだなあ、特区で造られた物はダキア国内で売るのは生産量の10%とする代わりに様々な特典をつけてやれば良いな。・・・合衆国企業だけを

優遇するわけにもいかないからな。」

選挙

臨時政府から派生した現在の政府であつたが、戦争終結したことによりアンチヨビは内外にアピールとして自由選挙を実施した。

焦点は憲法、徴兵、外交方針である。

右派は男性優遇・・・兵士に女性を禁止する、帝国と融和を重点とし、左派は合衆国、共和国、連合王国との外交方針を重視し、徴兵は男女平等に18歳で2年間とすべきとされ、極左派の革命戦線だけは連邦と融和、労働者の解放、選挙の停止を公約としていた。

諸外国から注目された選挙の結果チスクが指揮する左派共和党が社会党と連立政権を作ることにより組閣された。

首相はチスクとなり、新憲法で共和国と明記され、総統状態を解消し、ダキア共和国、大頭領アンチヨビ、首相チスク、副大統領にカールが就任した。

「革命戦線が危険だな。．．．内務大臣、不審な動きが起こったら直ぐに動け。」
「はっ!!」

戦争問題で他国．．．特に帝国から見ると不思議に思つかもしれない。
魔導師の火力不足だなんて。

だが待つてほしい。

これは演算宝珠の性能が1世代前だということを理解してもらいたい。

1世代前の演算宝珠の利点は安い、丈夫、扱いが比較的簡単に尽きる。

兵器としての信用度も高く、帝国でも一部部隊では隊長の自費で予備の演算宝珠として渡してあるところもあるくらいである。

話が脱線するが演算宝珠はメインとサブの2個ないと怖くて運用することができない。
い。

平時は事故で演算宝珠が破壊したらパラシュートで降下すればいいが、戦時では演算宝珠のないパラシュートで単独降下する敵兵なんて狙撃兵の的であり、大胆な自殺である。

まあパラシュートも無くせばまっ逆さまであるがな。

話を戻すが勿論デメリットもある。

出力が不足しているのだ。

他国並みに行動するなら何かを削らなければならない。

帝国魔導師なら砲撃術式を使えるほど出力が高いため攻撃にリソースを割けるが、ダキアの魔導師は他国並みの速度を出せば防御力は並み以下、攻撃系術式も貫通力を上げたりするのが限界である・・・一部例外もいるが。

「まあだからといって最新の演算宝珠を他国が輸出してくれるわけもなく、私の胸にある宝珠の様な別次元なのを量産できる訳もないが・・・旧式を連結しても最新の単体より僅に出力が上回るだけで魔力消費量は倍になるとは・・・。実験型とはいえ、これはもう少し量産は考える必要があるな・・・はあ。」

アンチヨビは兵器の信用問題と出力、量産性といった問題に直面していく。

「ほお、戦車は凄いな。なあエリカ。」

宝珠と王子

『おおカチューシャよ、死んでしまうとは情けない。』

焼死したと思っただら私は白、赤、オレンジ、黄色にうつすらと輝く空間に契約してよとしつこそうなQBと哀れみの目で見ているまほ、よくわからない白髪の少女がいた。

『ようこそ、脱落部屋へ。ぼくは貴女を歓迎するよカチューシャ。』

「……戦車とは凄いなエリカ。」

「……はあ。何を当たり前の事を言っているのだから。」

エリカの横に裸で小さなメモ帳を片手に本を読む男がいる。

帝国の皇太子である。

連隊長時代に下士官候補生だったエリカと知り合いそのまま愛人として囲われたのだ。

皇太子妃との関係も良好というよりエリカは皇太子を上官としか思っていないと告げられているため子は男なら中絶すると約束していた。

「・・・戦車の有用性は私が過去に散々言いましたよね。」

「ああ、玩具だと思っていたがこれは良いな。王に相応しい兵器だ。作戦等は考えがあるか？」

「10年近く前に亡くなっていますがとある将軍が戦車出現を予知し、20近くの書物を残していたのでそこから殿下の配下達と研究してきました。実物が無いので卓上論に過ぎませんが。」

「よい。私室では口調を崩せ。プライベートでも仕事と感じてしまうではないか。」

「・・・皇太子妃様に愛想を尽かされても知らないわよ。あなたは連隊長しかやらせてもらっていないんだから・・・。とにかく今は実物を作ること、小隊規模の運用方法を探すこと。」

「ハインツとエーリツヒだったか？元私の連隊に來た陸軍大学生は。あやつらも研究しているらしいが。」

「そうね。ハインツが戦車は速さと凡庸性がある戦車を求めていたわ。・・・これなんか技術部に渡してみたら。」

「・・・設計図か？どこでこんな物を？」

「私が書いたのよ。．．．自信ないけど。」

「おお、そうか。まあ出すだけならな。」

慣れないわ。

神とか名乗る変な奴に來世無いとか言われて。

人類は増えすぎたとか信仰心の欠場だとか知らないわよ。

戦車道も50年前に引退して孫やひ孫に看取られたと思つたら平民の訳のわからない帝国に転生よ。

魔導師の適正が高かったから進学したけど、レポートで軍について考えたら士官学校に入学させられて．．．気がついたら皇太子の愛人になって王宮で生活って．．．もつとこう、色々何段階も飛ばしすぎでしょ。

毒殺されそうで怖いから自分で食事作ってるけど。

戦車の設計なんて見るだけで普通書けないわよ。

はあ、これからダンスのレッスンと地方の兵舎に激励かあ．．．。

「皇太子殿下!!この設計図は素晴らしいですよ!!これなら我が国の工業力なら月間に10000両は量産できます。」

「それほどか。20両ほど練習として使ってみたい。出来たら回してくれ。」
「勿論ですとも!!」

「作戦科が戦車の有用性を見いだしていたら20両と言わず2000両は作るぞ。こんな物を少数生産だなんて勿体無い!!」

設計図にはII号のD型に近く、ダキアで使用された火焰放射機が載せられ、機関砲の為歩兵や軽装甲車両の打撃力も高かった。

何より帝国の150馬力エンジンで高速かつそこそこの防御力はまさに革新的な兵器だった。(ダキアの新型戦車も試作段階で破壊できる性能を見せ、更に500両追加生産される)帝国は戦車及び機械技術の関心を高めていく。

究極的至高の超素敵なヘッタン

統一歴1918年

革命から5年、戦争から約3年半が経過した今のダキアは合衆国との癒着度を更に上げていた。

ギリギリ経済植民地にならないように調整しながら、ダキアに誘致した起業の部品を原料採掘から小さな部品を作るまでダキアで請け負い、組み立てや最終調整は本国でやるといった方法は合衆国の経済界や植民地の少ない帝国とドンピシャにはまった。

勿論両者からも工業機械・・・マザーマシン類を大量に輸入しているため収支は合衆国はトントンから若干の赤字、帝国は黒字となっていた。

なぜ黒字か・・・アンチヨビが全力をもって国家戦略とした農業が2年前からついに好転し、大成長を遂げた。

そのため生き残った自作農の農家は穀物メジャー程ではないが大金持ちとなり、周辺諸国に売れるだけ売っている。

それだけでなくアンチヨビが生命の泉作戦と銘打った「人口増加政策」と市場からの脱】のために「複合型施設とスーパーマーケットの増加政策」の2つは供給側がどこに

卸せば良いかを明確な物にした。

政府が買い取れば一番楽だがそれでは発展はない。

勿論農家と起業だけが特をするのなら急増した労働者は困窮するのだが、そうさせないために戦争以来使つてなかつた私の貯蓄を切り崩し、公衆食堂や団地の開発、移民の労働者問題は道路や鉄道の複線化工事で相殺し、緩やかなインフレを実現した。

社会主義と資本主義が混じる不思議な国ダキアは発展していく。

問題もある。

愚民政策の弊害で教員がいまだに足りていない。

連邦から来る知識人亡命者や共和国、連合王国の感情操作のスパイとわかつていながら教師にしなければならぬほどである。

また、巨大貿易港計画も自国船が造れない、操作できないのダブルパンチで軍艦（海軍）という守りが無いためリスクが大きく、アンチョビ初の失敗政策と諸外国に呼ばれるが、暫定的処置として帝国、合衆国、共和国、連合王国、革命でオスマン共和国（トルコね）、インドア王国に1隻つつの駆逐艦か砲艦の貸付を依頼、船員のほとんどがそれぞれ別の国の軍人なので実際は貸付よりも自国船護衛艦なのだがバランス調整の為に必要であつた。

そんな苦悩と喜び溢れるダキアでアンチョビは軍の研究所にて実用化したヘッ

ツアー擬きを眺めていた。

全長7メートル、車体長5メートル、車幅3メートルと1回り大きく、ヘツツアーと同じ装甲厚を実現し、その中に350馬力のエンジンと対歩兵用の7.5cm榴弾砲、装甲車用の7.5cm長砲身タイプがそれぞれ取り付けられた2両のヘツツアー並んでいた。

「なあ、アントネスク……この兵器で何人殺れる?」

「……砲兵付きの歩兵700人は殺れるでしょう。」

「ではこれが10両編成で戦ったら何人殺れる?」

「……2万は超えるかと。」

「……もし、もしもだ。こんなのが沢山出てくるような戦争が始まったら……。」

「……。」

「私はダキアが空っぽになるまで抵抗するだろうな。」

戦争と国家主席のアンチヨビ

幼女戦記開幕

統一歴1923年

420馬力ガソリンエンジンと200馬力のディーゼルエンジン2機を搭載したシャーマン擬きが完成し、両方が採用された。(合衆国に売り込み生産ラインは合衆国にもある)

アンチヨビとケイは2人で飲みに行き、戦争前に大量生産できる車両が揃ったことに乾杯した。

「ダキアの工業力に乾杯。」

約10年諸外国から工業を誘致し続け、周辺諸国の紛争も経済の後押しをし、韓国の漢江の奇跡のような状態が今のダキアであり、昔のような列強の駒ではなく、自立した国となった。

「なんとか大戦前に自国防衛に必要な船、航空機、地上兵器、弾薬、食料、兵士、インフラは整ったな。」

「帝国の同盟国はインドア王国だったよね?」

「ああそうだ。帝国の外務省は無能が実に多くてやり易かった。」

「で、もし、もしも周辺諸国と帝国が紛争……いや、戦争を開始したらどうするつもりなの？」

「基本的には中立を維持する。ただ帝国には食料を、他国には武器を輸出し、力を蓄える。」

「食料の代価は？」

「戦争で発展し続ける両国の鹵獲した武器なんかは魅力的だと思わないか？」

「欲しいな。……しかし万が一帝国がとち狂って最初にダキアが殴られたらどうするつもりなの？」

「連邦、共和国と共同で殴る。連合王国もそこに加わるだろうな。何より合衆国も間接的に介入するだろう。」

「それまたなぜ？」

「自国企業が2000店もあり、在ダキア米人の数もの10万人を超えている。自国民を守らなければ選挙で落ちるのだからな。」

「引きずり込むと……。」

「どちらにせよ今の合衆国経済はダキアという市場と連動したがゆえに戦争がまだ始まってないのに潤い、世界一の大国になれているのだ。もしもダキアで安く作られてい

る部品が合衆国に入らなくなれば、もしダキアの購買力が止まれば……合衆国は未曾有の恐慌となるだろう。そうなるように何重にも仕掛けた遅延性の毒だったが……」

「……フェアプレイって言っていた頃が懐かしいわ。……未曾有の大戦争になるわね。」

「列強の順番を一旦リセットするぞ、最低8桁はこの世から消す。」

「いいわ。乞食の少女が今じゃ大將だもの。狂気に付き合うわよ。」

「助かる。……頼むぞケイ。」

3ヶ月後の6月帝国の北にあるレガドニア協商連合がノルデンに行軍し、撃退される事件が発生する。

『レガドニア協商連合はライヒ帝国に宣戦を布告する。』

『帝国はこれを受諾する。部分動員を開始するものとす。』

「来ちやつた。」

天災、鬼才、君の名は・・・

「開戦と同日にダキア入りとは幸先が良いな！これも日蓮坊のごか！」

バチーン

「この異端児が！鉄山先輩に迷惑をかけるなど言ってるのにい！」

「なんだね東條上等兵、君は今は私の部下。わかつてるのか？」

「鉄山先輩いー、うわあぁん。」

「・・・に、賑やかだな。」

「すみません、すみません。」

日蓮日蓮叫んで頭をバツクで叩かれまくっているのが、私の論文で感激しまくってい

た石原莞爾・・・34歳

泣きながら石原を叩きまくる女性は東條ちひろ・・・完全に東條英機だな。

平謝りを繰り返す男が永田鉄山だろう。

「ともあれ、ようこそダキア共和国へ!!歓迎するぞ!!」

大統領直接の出迎え・・・1武官に対してする歓迎の仕方を逸脱していたが、戦争開始で他国が騒ぐような事はなかった。

「済まないがすぐに大王国（連邦）と直接戦闘経験がある皇国側の戦訓を聞きたい。参謀本部に出入りできる外部顧問の役職を与えるからそこで我国及び貴国の益になるように動いてくれ。」

「白人でも我々を差別しないし、日本語を話すのが上手のだな。」

「永田さん。私は貴国を利用できるか試しているのです。益があれば最大限の融資をしますし、資源を産出する側の我が国は売る市場も求めているからな。」

「周辺諸国はダメなのですか？」

「少しは外交を知っておいた方が良いでしょう。．．．君主論だが隣国を援助する国は滅びると．．．。」

東條は天皇第一なので気にしてないが、今の言葉はアジア派と呼ばれている2人には強く胸に刻まれる．．．。

「ケイ、後は頼む。」

「はい。」

「あのく、失礼かもしれませんがケイ殿はダキア人ではありませんよね？」

細かい所を気にする東條は、同じ女性であり、若くして大将になったケイに注目しており、ペンとメモを持って聞く気満々である。

そんな姿を見たケイは歴史にあるような東條の評価を改める・・・目標や上司が要れば輝ける人だったんだなと・・・。

「血統的には連合王国系の白人らしいけど、生まれは合衆国だし、乞食だったのをアンチヨビに拾ってもらったし、結婚の面倒まで見てくれたからね。」

「な、なるほど。では「戦車の開発と運用方法を教えろー」石原ア!!」ガリガリガリ「いいよ、歩きながらだから簡単だね。・・・乞食だから相手がいかにすれば怖くなるかよくわかる。自身が恐怖に思うことは視覚外からの物取り（スリ）、夜の人攫い、そして巨漢だったり・・・それを軍に置き換えてみたの。視覚外って相手がわからない場所からの攻撃じゃない。これは奇襲にできる。夜の人攫いもそう。じゃあ巨漢は？って考えた時初めは列車が思い付いたけど、それは生活に馴染みすぎていて怖くない。で、車にしたの。ある程度の道を高速で走る鉄の化け物に見えたの。そこに大砲を載せていかに敵に怖く見せるか考え続け、軍事学を学んで恐怖から殲滅に思考を切り替えてさらに化け物を洗礼させたの。それを運用するのは自然と考え付くものよ。」

（まあ嘘だけど。前世なんて言えないからね。）

国防計画

「挑発しつつ時間を稼ぐ・・・平時に日産4両の戦車もヘッツァーと日産2両のシャーマン・・・国力が無いと辛いな。・・・幸いヘッツァーは数があるが、帝国が本気を出してこちらに来たら踏み潰されるだろうな。」

必死に国力を上げてきたが弱小国のダキアではこれが限界だった。

平時で月1000両造る帝国と月産でも180両が限界のダキアでは普通なら勝てない。

ましてや消耗戦となれば人的、物的においてすぐさま枯渇するのが目に見えていた。「まあ普通に戦うならな。」

帝国並みに戦争経験が豊富な熟練兵と下士官は連邦戦で増加し、どこよりも早く戦略空軍構想ができてきているダキアは、合衆国という外付けの国力増加装置により潜在能力は未知数である。

「ボーイングが売り込んできた国内で生産できる爆撃機のY1B-9・・・投資したかいがあったな。」

近未来的なフォルムをした爆撃機は出力不足で高度も速度も遅いが、私からしたら2

0年バージョンアップを繰り返せば使い続けられる様に感じた。
そんな爆撃機だ。

「戦闘機は合衆国から供給されるP-1より自国産の1号戦闘機を量産たいところだが・・・。」

試作時の事故率7割のダキア製航空機はパイロットにとって死神であり、脱出装置と魔導師の補助が合ったため死傷者は少なかったが、終戦間際に完成したホーカー・フューリーの劣化コピーは試行錯誤とダキアと一般の海外企業の全てを注ぎ込んで作られた傑作機で、525馬力は当時から諸外国と一線を画す出来映えであった。

が、技術が他国にも漏れたため航空機の技術競争が始まってしまい、アンチヨビ的にこちらは物足りなかった。

「皇国からの客が来ているとはいえ、国政を疎かにするわけにもいかんからな。・・・さて、帝国

どれぐらい消耗するか・・・楽しみだ。」

帝国のとある将校は頭を抱えていた。

彼は鉄道を愛する者だが兵站を任せられいたがために悩んでいたのだ。

「まだ2週間でこれ程の物資を消費するか。」

物資のなかには食料に関するものもあり、この2週間で蓄えていた備蓄分の食料が消費し飛んだ。

インドア王国で起こった噴火の影響で収穫量が下がったのが原因である。

(しかし、ダキアは豊作だったではないか。．．．農業省．．．いや、文官はやはり信用できないな。)

今年度のダキアからの穀物依存率は10%とやや高い位であったが、戦争により輸入に制限がかけられたため今後ダキアの輸入は増えていくだろう。

「ダキアの中立は我国を勝利に導くだろう。」

「ダキアの中立は我が連合王国に利益を与えるだろう。」

副首相のチャールブルは首相であるロイドに向かってそう雄弁を振るつた。

「どちらも対帝国で一致しており、アンチヨビの中立もチャーブル経由でいち早く知らされていた。」

「彼女は最終的な戦略目標として帝国の餓死を選択した。その為には協商連合は見殺しにし、共和国には防波堤として機能してもらわなければならないのです。」

「明確に宣戦を布告するのは議会の意見を統一志手から良からう。共和国にはダキアと我々が武器を売って耐えてもらうことにし、止めは連邦でよからう。」

「ロイド首相、それは共産圏が広がるが……。」

「なに、共倒れを狙えば良い。合衆国の経済界も戦争に最終的には参加する旨を伝えられている。」

「ではまずは海軍と軍需の拡張を。」

「そのようにキツチャーに伝えてくれ。」

皇太子殿下

戦争が始り補給をどうするか悩んでいる後方の将校達の気持ちも知らず、皇太子は実驗戦車師団を含む第五軍を率いて共和国への守りについていた。

「宣戦布告前なのにピリピリしてるわね。」

「ふん、共和国の奴等は常に帝国の脅威に去らされているからな。怖いのだろう。」

「そうだけ殿下、愛人参謀殿も殿下並みに気を張っていた方がいいぜ。」

第五軍参謀長ドルフ

「まあワタシは殿下の戦車師団がここでは最高の役割りを果たせるように尽力するのみでありますな。」

第五軍参謀ホト

「3号戦車・・・最新戦車だがやはり信頼性は抜群だな。もつと早く欲しかったぜ。」

皇太子護衛兵件戦車師団副師団長ハインツ

「共和国は戦略性において負けております。勝利は我々の手の中です。」

皇太子護衛兵件戦車師団師団長エーリッヒ

「ふはは、余にはこれだけ頼りになる参謀、兵士諸君がいるのだから安全だな。・・・ド

ルフ、共和国はいつ頃動くと予測する？」

「へへ、2、3ヶ月と行ったところだろうよ。突破は厳しいが、命令されてるのは足止めだ。忘れるなよ。」

「余を誰だと思ってる？・・・ライヒの王子だぞ。」

後の歴史ゲームのイメージでアンチョビのライバルとして知将のイメージがあるが、王に必要な器をすべて揃えたカリスマある指導者が皇太子である。

アンチョビのようにナポレオン1世とナポレオン3世を足した政治、軍事、経済の化け物ではないが覇王の片鱗は既に見せていた。

共和国宣戦を布告する。

歴史の教科書や当時の新聞にはこの一行で済まされているがこの場所にいた帝国第五軍はアレーヌ市周辺で共和国のプラン17作戦に伴う共和国軍主力のほぼ奇襲攻撃に遭う。

「来た。・・・殿下、指示を。」

「何を慌てているのだ諸君？もう筋書きはできているのであろう？並ば仕事に戻るのだ。余は君達の奮闘の証言者たらんとす。」

「へへ、・・・橋を落とせ。防衛戦の開始だ。」

戦力差4倍・・・時の帝国の参謀総長はその数に読みを外したと思い皇帝陛下に「皇太子殿下は諦めてください。」

と報告し、怒りで皇帝陛下はサーベルを抜いたが斬りかかることはなく、次の報告を待った。

1日目

戦車と歩兵の差が出る戦いであり、戦車1両で共和国の3中隊が地図から消える激戦

が繰り広げられる。

2号戦車の硬い装甲により最新の3号戦車よりも撃破率が低く、対戦車の主力であった砲兵の支援が無ければ川の渡河は成功しなかったと言われる。

作戦成功の功労者として敵の魔導師30名以上を撃墜したミシエイル・ホスマン少尉率いる魔導師部隊がエース3名を含む共和国最精鋭魔導師部隊の称号と部隊員全員が1階級特進する事となり、世界初の大規模エース部隊に登録される。

「ほう、戦闘機用の対空砲で魔導師5名を死亡させたか……。」

「ええ、引き続きレポートを参謀本部に。」

「ああ、そうしてくれ。」

（やはり対空砲が魔導師にとって航空機以上に天敵か。）

アンチヨビは帝国内のアレーヌに偶々いたスパイ経由で帝国の戦争情報を入力していた。

「対空用に転用できる地上目標用兵器……ドイツのトースト自走砲はこの世界だったら革新的な戦果を得られただろうに……まあダキアでは生産どころか試作も数年は無理

だから合衆国に投げるか。 . . . おーいチスク、設計図を書くのを手伝ってくれ。」

戦争経済

戦争は儲かる・・・それは自国が圧倒的に優位であるか、周辺国で大規模な戦争がある事ならばなおよろしい。

ダキア経済発展には周辺諸国の不安定な情勢も利用してきている。

連合王国領土、テヘランがメフメット帝国崩壊直後に分離独立した時はメフメット帝国の中心的だったオスマン（アナトリア半島）双方の仲介役として両国に武器をばら蒔いた。

普通なら恨まれる行為だが、自国軍が弱体化していた双方には感謝され、連合王国の圧力がテヘランに行った時には非公式に避難し、内紛で更にダキアは儲けた。

・・・確かにダキアは儲かっているがそれはダキアに存在する多国籍企業だけではないか？

という疑問は最もである。

実際大企業はアンチヨビの個人的に持つ企業除けば中規模が精々だが、最新の軍事技術を民間に転用をしていたお陰で昔の時計工育成も合わせたからこそ自国産戦車が造ることができたわけで・・・。

まあ集中管理させれば十分な力はある。

順調に戦争に備えるダキアに対し、アレーヌ周辺の帝国軍と共和国軍は消費だけを繰り返していた。

2日目

渡河に成功した共和国軍は部隊を再編もせず、攻撃を継続する。

一方戦術的な撤退に成功していた帝国第五軍は簡易塹壕と有刺鉄線を組み合わせ、そこそこの防衛陣地を構築した。

また、川から陣地まで緩やかな上り坂となっており、地の利は帝国軍に味方した。

時間を置かず攻勢したため、共和国軍は砲撃支援が間に合わず、3時間に両軍4万人の死体で川周辺の坂が埋め尽くされ、美しく咲いていた草花は無くなり、体の一部が破損した肉袋だけが夕方には転がっていた。

「は、ハハハ、アハハハハ……見ろ人がゴミのようだ！」

「殿下、あまり人を蔑むのはよろしくないかと。」

「ふふ、少々興奮していたようだ。ありがとうエリカ。だが、私も血だな。先祖のフリード大王陛下の血が……な。」

「そ、そうですか。」

「ドルフ、僅かな時間余の話を聴いてくれないか?」

「へへへ、悪人みてーな面だな。いいぜ、殿下。」

「殿下がいれば帝国は安泰だな。いいぜ、その作戦やつてやるよ。聴音機を出せ。陛下が別次元の作戦を考え付いたぜ。明日から反抗作戦に出るぞ。」

それは皇太子殿下が考え付いたのは音の世界である。

共和国軍の死体を見ていて彼は集団の歩兵が機関銃のど真ん中に突っ込み、体を破損していく光景を見ていて、いかに敵の死体を量産しつつ、防衛を成功させるかを考え続けた。

共和国はなぜあれほどの損害が出ているのに攻勢をやめないかは、その先に勝利の希望が有るからであり、帝国は受け身という構図が有るから攻勢をやめないと考え、受け身は共和国であると考えさせる必要があつた。

その為には効率的に打撃を与える必要があり、戦車をいかに活用するかが肝であるとも考えた。

そしてそのピースが音で相手が多くいる地域を探し、戦車を大量に突っ込ませる作戦であつた。

共和国軍は戦車の対抗策が大砲しかない・・・戦車が共和国軍と乱戦になれば誤射を恐れ撃てない、撃つても必ず士気を落とすと考えた。

それは別の世界線でカンブレーと呼ばれた地域で起きた戦いに酷似していた。
無いのはガスだけである・・・。

皇族将軍

絶望的な戦力的不利をもとせせず、奇跡の反抗作戦を執行する。

「音響弾発射!!」

「発射!!」

数十発の音響弾が共和国陣地周辺で破裂する。

その音は超音波となり、普通の人間にはまず聞こえない。

3日目となるこの日は濃霧となっており、上空からの魔導師による観測もできないほどであり、今回の砲撃も散発的な事から牽制であろうと共和国軍は判断し、霧が晴れたら再度攻勢に出るため、部隊が密集していた。

「天は帝国に味方した!!勝利は余のものぞ!!栄光に向かい突撃せよ!!」

「攻勢開始だぜ。」

その攻撃は激しく、写真等の証拠がなかったため、戦闘経緯が近代になっても不明だ

が、統計で共和国軍死者16万人、捕虜4万人、砲600両と世紀の大敗を決した。

だが、帝国軍も1万人近くの死傷者が出たこと、共和国の後づめにヘタンという中將がおり、防衛陣地を速やかに設置できたことで、崩壊は防ぐことができた。

だが、これより後に共和国軍としての大規模攻勢は不可能となり、アレーヌ攻防戦は帝国の勝利で幕を降ろす。

今回の攻防戦は帝国に皇族としての英雄をもたらした。

皇太子殿下は帝国の英雄という政治的なアドバンテージを獲得し、疑問視された能力面で全体を黙らせる事ができ、攻防戦を共に戦った戦友の士官、下士官、更には兵士は出世のレールに無理矢理でも乗ることとなる。

兵士の中に、戦後の帝国首相ヒットレルもここにいた。

「……想像しているより帝国が強いのか、共和国が弱いのか。」

「帝国が強すぎたのでしよう。」

チスクも言うようになったな。

外交の半分以上を任せられるチスクだからか？

「まあいい。共和国経由で帝国のスクラップが手に入った。解析すれば利益になるだろう。」

「それは良いことですね。アンチヨビ様、2つ報告があります。」

「ん？」

「1つは来客です。もう1つは合衆国から。」

「来客を先に。」

キー

「よお、チスク久しぶりだな。アンチヨビ様もどうも。」

「なんだお前かチトー。」

「レジスタンス組織はできたぜ。・・・バルカン諸国の大国化運動は夢かも知れねーが俺はそれに全力を投じるぜ。」

「その前に邪魔な帝国には消えてもらわないといけない。・・・チトー、攻勢に最低2年の年月がいる。こちらからの合図は合衆国を焚き付けてから何らかのアクションをする。無茶はするなよ。」

「わかっている。」

レジスタンスの組織は私が世界中で制御している社会主義者達を通じて編成している。

共和国、帝国領占領地域に大半があり、共和国レジスタンス達には万が一帝国に早期に敗北した時の備えとしていたが、使わなければならぬかもしれない、有力者を集めるために根をはる。

「……ふうー。チスク、幹部を集めてくれ。今日は飲む。」

主人公

「見ろ！共和国兵がゴミのようだ!!」

世界中の新聞に載った帝国の皇太子を見て誰かが言った。

「もしかしたら欧州を手に入れたボナパルト大皇帝のような人物が生まれてしまったのでは?」

と……。

「ふくむ、やはり歴史の繰り返しではないな。これなら史実のような敗北を繰り返す等という確信はない。」

ターニャ・デグレチャフは病院のベッドの上で新聞を読んでいた。

そして笑う

ニタア

「共和国の純粋な人的の枯渇は近いな。植民地から連れてくるかもしれないが、質は落ちる……少しは楽になるかもしれない。」

『して、アンチヨビ、今時大戦はどちらが勝つ。』

『そうだ。旧大陸に居ながら我々ブラックハウスに参加しているお前の情報を聞きたい。』

合衆国裏政府・・・大富豪で、政府の裏まで知っている者だけが所属できる。

画面越しに映るアンチヨビは執務室で堂々と座っていた。

「戦争は10年前から予期してきた事だ。帝国は緒戦は勝つだろうが、長期戦は無理だな。既に短期決戦は不可能な状態を構築した。協商連合や共和国が脱落しようとする戦争は終わらない。」

『帝国は負けるか・・・。』

「次の主戦場は共和国、そして南方大陸（アフリカ大陸）の北部に移るだろうな。」

『儲けられるな。世界中の富が集まるぞ。』

「武器、弾薬、保存食は全力生産しても問題ない。高値で売れるし、武器と弾薬は売れなくてもダキアが責任をもって購入する。」

『船舶はどうだ？』

「共和国陥落後アトランティス海（大西洋）に潜水艦が出てくるまではバカ売れはないが作って損はないだろう。輸送船ならどの国も買うだろうがな。」

『ダキアは帝国と勝負したのなら勝てるのか?』

「1対1は無理だな。第二戦線位に思つてほしい。」

『今のうちに共和国に兵器を輸出しておくか。』

『今すぐ倒れられても困るからな。』

『しかし。』

「ダキアに兵器関連を輸出する時はオスマン経由で頼む。今バレるとまずいからな。」

『しかし、アンチヨビ。では帝国を直接倒すのは誰なのだ?』

「合衆国と連邦、連合王国だろう。」

『老いた世界王国とガリガリの連邦が戦えるのか?』

「紳士と共産主義者は甘く見ない方がよいぞ。」

『ふむ……。』

『わかった。今回はこれで解散だ。』

「わかった。」

ブチ

「お疲れ様ですアンチヨビ様。」

「チスクか。なにか心配か?」

「いえ……。では、1つ。南部の2つの国がまた燻っておりますが。」

「はあ。またか。最悪ブルリアは保護占領、アテネは内戦させるか。」

石原あ

「アントネスク殿!!ヘス殿!!小官なりに分析した防衛計画書です!!」

「石原ア!!すみません!!すみません!!」

もうギャグのようにしか見えないが、アンチヨビから特機密以外は見せても良いというのと、意見交換を積極的にしろという2つの命令により石原と東條は参謀本部で自由に書物を書いたり、今回みたいにレポートを手渡しに來たりする。

石原が出したレポートの中にはアンチヨビも考えさせられる技術や思考がある。

例が遺伝子組み換え（緑の革命）、絶対零度の人の活動停止（コールドスリープ）、下のウラン物質に含まれる原子力によるエネルギー抽出（核、原子力発電）、地下熱（地熱発電）、最終兵器による報復攻撃（報復核攻撃）と、未来を知っているアンチヨビだから恐怖するし、理解もできる。

そんなものも有れば、今回のような

【防空計画立案書】

と書かれた非常にまともな物もあった。

戦争勃発から数週間。

アンチヨビは連邦と合衆国、連合王国との一時的な共闘・・・世界連合軍創設をしようと企んでいた。

しかし、この世界では第一時大戦がなかったことにより、連合軍の利点がほとんどの将校がわかってないのが創設を難しくしていた。

国内のダキア軍は連邦との戦争により、数の制約を理解していたため、連合軍創設には意欲的な意見が多く、残念ながら大国の1軍と互角の戦力しかないことが、この意見が浸透する土壌となったのは悲しんだ方が良いかもしれないがな。

この利点を理解している海外の軍が共和国の連絡将校1人と連合王国の元首相の爺くらいしかない。

「・・・はあ、合衆国は選挙で動かしづらい。大統領がインフルエンザで既に亡くなっていたから政府がパニックになっていたからな。連邦は何度目の粛清だ？ トップと対話するしか信用性が無いからなあ・・・。」

ヨセフの疑心暗鬼ぶりに呆れながら淡々と次なる一手の準備を始める。

帝国の南方方面軍では対ダキア戦略に向けた会議が始まっていた。

第二戦線のため、常備軍は3師団と少なく、使える予算も少なかった。

それでも急速に帝国に影響力を増していくダキアを警戒するため、無い無いと言いな
がらも知恵を出しあっていた。

「そもそもダキアがこれ程まで力を付けるとは10年前は考えられなかったな。」

「アンチヨビによる革命か。王族の一部をこちらが抑え、可能なら介入しようとも思っ
たが、予想以上の馬鹿どもだったな。」

「仕方ないだろう。連邦も含め、周辺の大国全てに不可侵条約を結ぶのはやつしかでき
んし、介入できそうだった対外戦争も1年以内に全て終わってしまったからな。」

「それよりも政権の権力が強大で有りながら不正が少ないことだ。」

「実に歯痒いな。」

第一次共和国進行

現在2つの戦線を抱えた帝国は次なる一手を打とうと模索していた頃、アンチヨビはカタルーニヤ合同王国（スペイン）と相互不可侵及び貿易協定を締結した。

合衆国からの船舶からダキア向けの中間拠点として中立宣言をしているカタルーニヤ合同王国との歩み寄りには自然な流れである。

合同王国と手を組んだことで、ダキアは旧大陸と南方大陸の間にある海域の安全を獲得するにいたる。

アンチヨビが合同王国と手を組んだことによりダキア膨張が決定的になり、南方司令部ではダキア制圧作戦を立案するが、親ダキア派の参謀本部将校による介入で頓挫する。

そんな中で、共和国の大攻勢を防ぎきった皇太子殿下率いる第5軍は一旦後方にて再編を受けることとなり、替わって中央より歩兵中心の第7軍と第8軍が到着、そのまま

攻勢を開始する。

（・・・なぜ敵は機械化していないのだ？・・・あれほどの戦車を再び投入されれば、我々共和国軍は第二防衛ラインまで下がらなければならなかったが・・・）

「ヘタン大将（前大将戦死のため昇進）、塹壕より迎撃を開始します。」

「よろしい。ダキアより輸入した新型のPMライトマシンガン（Perino Model 1908 軽機関銃の改良型）の威力を確かめるぞ。」

「は!!」

ヘタン大将は70近い高齢者であったが、防衛戦での指揮能力と継続戦闘能力は共和国内部で突出していた。

分厚い弾幕と、魔導師のエース部隊の活躍により難なく撤退に追い込むにいたった。

攻勢の失敗により帝国参謀本部は戦略の見直しにとりかかり、南部方面軍の削減を決定し、北部方面軍を増強し、協商連合の瓦解を目的とするオース・フィヨルド上陸作戦の基礎が出来上がる。

そんな中、ターニャ・デグレチャフ技術検証要員がエレニウム95式の運用実験に成功する。

『同志アンチヨビ、我々に技術提供とは太つ腹だな。』

「いやいや、このままでは帝国が旧大陸を呑み込むからな。合同工場を国境沿いにつくり、そこでとある戦車を開発したくてね。私の国だけだとしてもじやないが生産ラインが違いすぎてね。」

『ふん。混合経済等をやっているからそうなるのだ。』

「いやあ、大きな政府の資本主義型経済は今の状態なら必要だ。私の後ろにいるスポンサー方もいるからな。」

『ふん。．．．で、同志アンチヨビ、我々連邦に望む戦車はどんなものだ？』

「一言で言えば．．．そうだな．．．怪物。」

アンチヨビはKV-1を連邦が大戦参加までにある程度揃えるつもりでいた。

KV-1も良作ではあるが、量産はダキアではできないので、今度は合衆国でBT-1を大量生産できるように工場を建てることになる。

?< シャーマン || ヘッツァ > KV—1

「数が足りないな。」

隣の国の戦争の報告を聞くたびに世界最年少の陸軍大将のケイはため息を吐かずにはいられない。

今のダキア陸軍は精鋭であるという自負はあるが、絶対数で見るとひどい有り様で、前回の総力戦をしたため、今回も総力戦となれば、産業構造が破綻する可能性もある。

地下街や地下鉄、飛行場の代わりになる高速道路は順調に建設されているが、16師団中装甲師団を4師団したら、支援兵科で定員に達するな。

「しかしKV—1は登場したところで連邦でも活用できるか怪しいものだぞ。」

連邦が一番欲しているのはこの実験車両だろうに・・・。

開発されていたのは、BT—SVである。

シャーマンはダキアからすれば高価であり、ヘッツァーもダキアの生産ラインで精一杯である。

なぜBT—SVなんかを開発しているか。

合衆国の発明家ジョン—W—クリスマス（クリステイ）博士をアンチヨビが一本釣

りしてきたからだ。

クリスマス博士とダキア支部のフォード社支部長と話し合い、ダキア用に戦車製造をしてほしいことを伝えた。

支部長は難色を示したが、社長であるフォードにアンチヨビが言うのと、支部長が脅される形になり、戦車第一人者のケイを交えて戦車開発が始まった。

コンセプトは防御力、機動力で、75mm方が搭載できるのが条件だった。

T-34は論外、A-20を造るくらいなら車体はクリスマス博士のBT戦車構想に、砲塔を巨大化させ、75mmがはめられるように改良された。

そのため最高速度が5キロ低下、装弾数も45発と心許ないが、生産性、防御力、何よりも安いのが売りの戦車となった。

「装甲取っ払ってうるべ。」

（（なにいつてんだこいつ））

ただ、クリスマス博士の頭がおかしい点を除いて問題はなかった・・・。

「合衆国、連合王国、皇国に輸出するぞ。いや、技術交換の材料にする。」

アンチヨビは垂直装甲を多用したBT-1を輸出用にする決め、ケイはあまりの急

展開に頭を抱える。

アンチョビの言葉が足りてないが、深い意図がある。

既にアンチョビは戦後世界構築を視野に入れていた。

その為には合衆国と連合王国、皇国を膨張させ、中華利権問題で戦わせ、軍の最新化と、どうせ膨張する連邦と冷戦にさせたい意図から海軍国家を少しでも陸軍を強くしたかったのだ。

鉄山達を呼んだのもこのためである。

(連合王国が迷走しなければ成功するだろう。・・・頼むぞ紳士達。)

「株価が・・・落ちてる・・・？」

連合方面では最悪の事態が発生する。

貧弱すぎた合衆国経済

プラン345・・・帝国の戦略方針であるが、それにしたがって北方にて大規模攻勢の準備を行っている時、合衆国及びダキア・・・いや、帝国と連邦以外の合衆国で影響がある国で著しく継続戦闘能力が低下する事態が発生していた。

ドン

アンチヨビは机に置かれた合衆国の株価のグラフ表を叩いた。

「チスク!!」

「は!!」

咄嗟にチスクを呼んでしまったが、今、短期的にできる手など無い。

適当な部下にお茶を頼めば良かったのだが、今はチスクを呼びたい気分であった。

「・・・チイ。すまない、チスク。茶をありがとう。」

まさか暗黒の木曜日がこれほど早く起こるとはな。

(そもそもだ、なぜ戦争序盤で・・・なぜ?合衆国の輸出額は共和国を中心増えていたはずでは・・・これで特をするのは・・・帝国、連邦の2つだが連邦は工業増強計画により部品を合衆国から輸入しているから切れる。帝国か?そこまで優秀な経済学者と実

行可能な合衆国の経営者はいたか？)

いや。いない。

では・・・

ドン

「連合王国の紳士どもか。ポンドの世界通過維持をするために合衆国ドルの元を叩いたのか!!」

頭を抱えながらアンチヨビはダキア経済の経営者、経済学者を招集した。

「ダーズリン夫人これでよろしかったのかね？」

「ええ。十分に。」

「チャープルは複雑そうだったがな。」

コトツ

「散々植民地に押されていた我らが連合王国が遠慮をする必要が有るのかしら。ネヴェル卿」

「ああ、その通りだ。莫大な資金を今回の恐慌で連合王国は獲得できた。チャーブルとダージリン夫人、ダージリン卿の考えた帝国に勝るタンクの新型の費用も、海軍のグロリアス級空母の量産も、地方都市の再開発費も全て賄ってなお残る。これで万が一帝国が共和国を飲み込み、旧大陸の覇者となろうが、我らが偉大な連合王国は負けることはない。」

「でしような。6ポンド砲搭載のバレンタインがあれば4年は連合王国の優位は確実にしよう。」

「4、4年か。」

「ええ、4年も有れば帝国も連邦も、もしかしたらダキアも強力なタンクが出来上がるでしような。事実。シャーマン、ヘッツァー、更に輸出用のBTまでありますからね。」

「なるほど・・・。」

「・・・このまま戦略通りにいけば良いのですが・・・。」

「お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。今回は大統領として、国家経営者としてこの未曾有合衆国による大恐慌を回避しようと思ひ、協力を依頼したく招

集したしだいです。」

「だ、大統領閣下……我々経営学者でもこれ程の恐慌は未知数です。解決法は……」
「あるんだなあ……これが。まず給料カット、リストラをここにしている経営者はしなくてもらいたい。しても通常状態の範囲内でだ。」

「なんだと!」

「アンチヨビ貴様!! ついに赤の本質を!!」

「でだ、我らがダキア政府はこれを達成した企業に支援金を出す。更に未開発であったダム为建设計画や石油パイプラインの建设等の内需と戦争中の国家に武器を売るために準戦時体制とし、武器をありつたけ製造してこれを相殺する。足りなければ土地バブルでも擬似的に起こすとしてもするが……いかがかね?」

「もつのかそれでダキア経済は……。」

「なめるな。……既に中堅国家だぞ。」

ダキアは合衆国と一時的に離れることとなる。